13章　移動と移民にともなう死生観の比較

倉元直樹　中村俊哉

本章では、移動や移民が各地域でどのようになされているかの実態を示し、移動によって死生観の違いがあるのかどうかを調べるとともに、移動の多い地域はどのような特徴が現れるかを解明することを目的とする。

表1から分るとおり、福岡は「大学から」が15%と多い。沖縄は「先祖代々」居る人は一番高く83%である。インドのベンガルは「数世代前」「親の代」が多く、「成人」「留学生」も多かった。インドネシアのジャカルタは「先祖代々」が最も少なく39%であり、「子どもの頃」来た人が25%と多い。「大学から」が19%で多く、首都としての特徴があるのかも知れない。バリ島は、「先祖代々」居る人が78%と沖縄に次いで多いものの、大学、成人になってからの人は沖縄より多い。中国の遼寧省は、「数世代前」に来たという人が45%と多い。これは、満州国から戦後にかけての移住、移民と考えられる。

地区の大きさからは、ベンガル、遼寧が比較的大きな省である。面積としてはジャカルタが一番小さいと思われる。ジャカルタのデータは、学生が多かったことを考慮しても、現在形で移住混合が増えて居ることを示し、遼寧は50-60年前に移住混合がおこった地域である事を示している。文化接触の度合いを知る上で参考になろう。沖縄は、文化混合がきわめて小さい地域ということが分る。

	福岡	沖縄	ベンガル	バリ	ジャカルタ	遼寧	合計
1代々住んでいる	121	201	76	121	14	105	638
%	57.6	83.1	52.1	78.1	32.6	39.0	59.9
2数世代前に来た	16	5	23	3	5	120	172
%	7.6	2.1	15.8	1.9	11.6	44.6	16.2
3親の代に来た	19	10	19	3	3	21	75
%	9.0	4.1	13.0	1.9	7.0	7.8	7.0
4子どもの頃来た	9	6	11	4	11	3	44
%	4.3	2.5	7.5	2.6	25.6	1.1	4.1
5大学から来た	32	15	1	13	9	10	80
%	15.2	6.2	0.7	8.4	20.9	3.7	7.5
6成人になって来た	8	2	7	10	0	3	30
%	3.8	0.8	4.8	6.5	0.0	1.1	2.8
7留学生	0	1	6	0	0	0	7
%	0.0	0.4	4.1	0.0	0.0	0.0	0.7
その他	5	2	3	1	1	5	17
%	2.4	0.8	2.1	0.6	2.3	1.9	1.6
合計	210	242	146	155	43	267	1063

表1　各地域の定住と移住の内訳

以下の分析からは、留学生とその他を除外し、代々住んでいるか、それ以外の移動で来たのかによって行う。

	福岡	沖縄	ベンガル	バリ	ジャカルタ	遼寧	合計
移動、移民群	90	40	72	37	30	159	428
先祖代々群	120	199	73	118	14	104	628
合計	210	239	145	155	44	263	1056

表２　移動、代々の区分け

なお、中国のみ、民族名を聞いたので、表３に示す。漢族がいずれにおいても圧倒的に多かった。

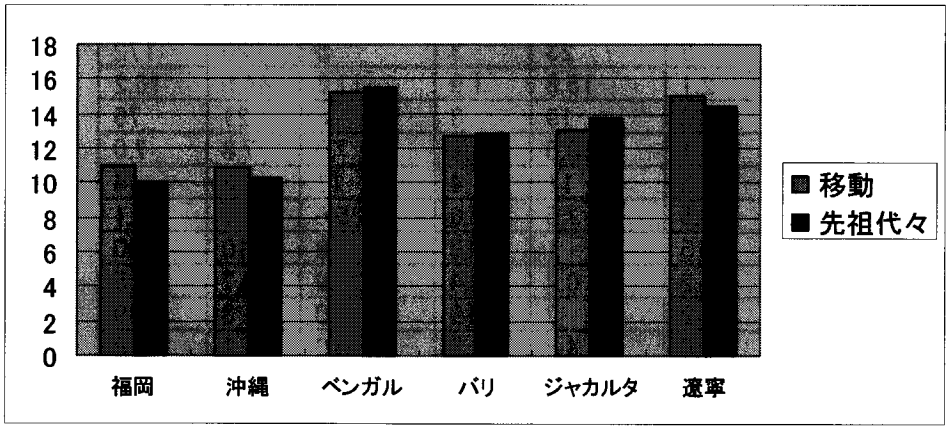
民族別	遼寧		雲南	
	人	%		
	277		12	
1　漢族	248	89.9	9	75.0
2　壮族	0		1	8.3
3　回族	0		0	
4　満族	18	6.5	0	
5　朝鮮族	2	0.7	0	
6　蒙古族	8	2.9	0	
7　蔵族	0		0	
11　傣族	0		1	8.3
12　その他	0		1	8.3

表３　民族

空想対話尺度

福岡、沖縄、遼寧などでは移動している人の方が高いが、地域によって異なる。

$F(1,1033)=42.1^{***}$

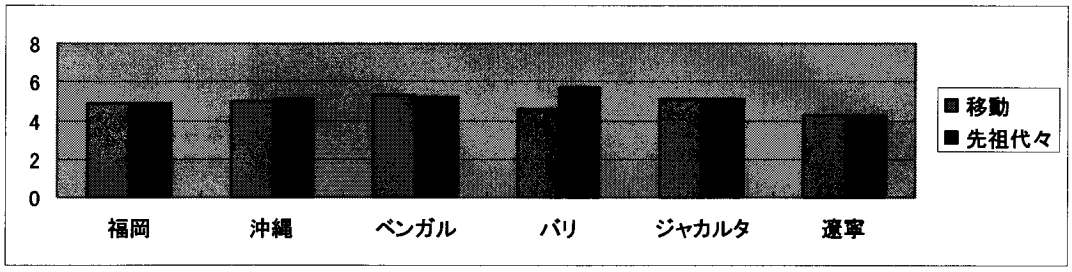


グラフ１　移動と FDS

魂の自律観

グラフ２は「死んだ後どうなるかは、魂自身が決めることである」(DTRM1) と「死後に天に行くか、地の下に行くかは、魂自身が決めることである」(DTRM5) の和を現わしてい

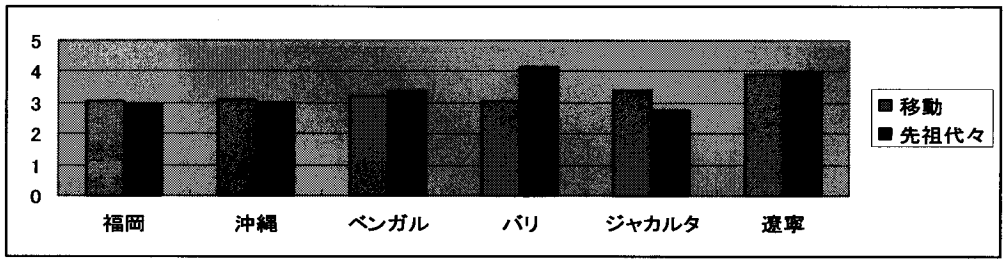
る。**統計的に有意ではないが、バリ島では明らかに移動してきた人ほど、魂の自律を信じていない。定住者と移住者の間でこれだけ考え方が違う地域も珍しい。**
F(1,1023)=2.07n.s.



グラフ２　移動と魂の自律

還元

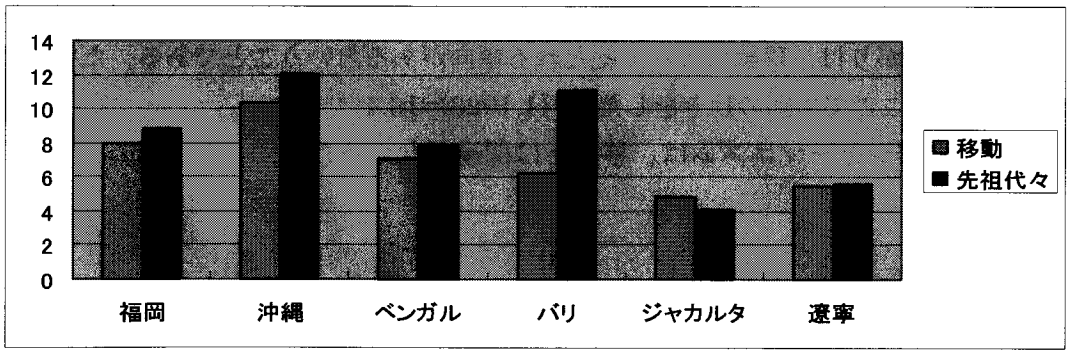
死んだあとに、魂も肉体と同じように大自然の元素に戻る（DTRM4）という考え方も、バリ島では定住者だけが高いのに移住者低く、両者が全く異なる。逆にジャカルタは移住者に魂の還元の考えが見られる。F(1,1033)=0.63ns



グラフ３　移動と魂の還元

お盆尺度

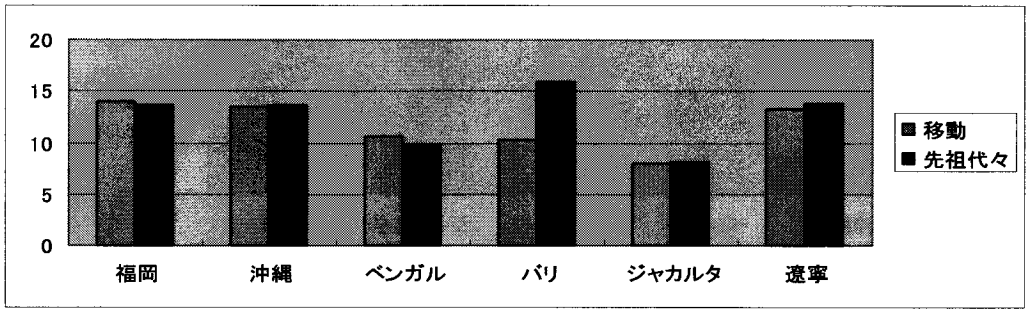
お盆尺度（OBS）は、世界的にも、移動する人々において減少することが明らかとなった。ただしジャカルタは移住者の方が高い。F(1,1021)=25.0***



グラフ４　移動とお盆

祖先対話尺度（ADS）

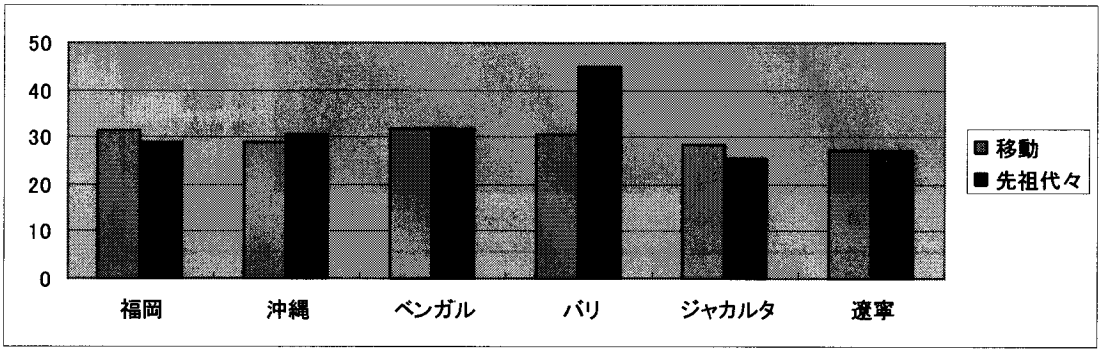
これも、バリ島での違いが顕著であり、代々の居住者の方が高いのに対して、移動した人は低い。F(1, 1034)=6.20*



グラフ５　移動と祖先、死者との対話

輪廻尺度

ここにおいても、バリ島における定住者と移住者の違いは顕著である。
F(1, 1001)=16.4***

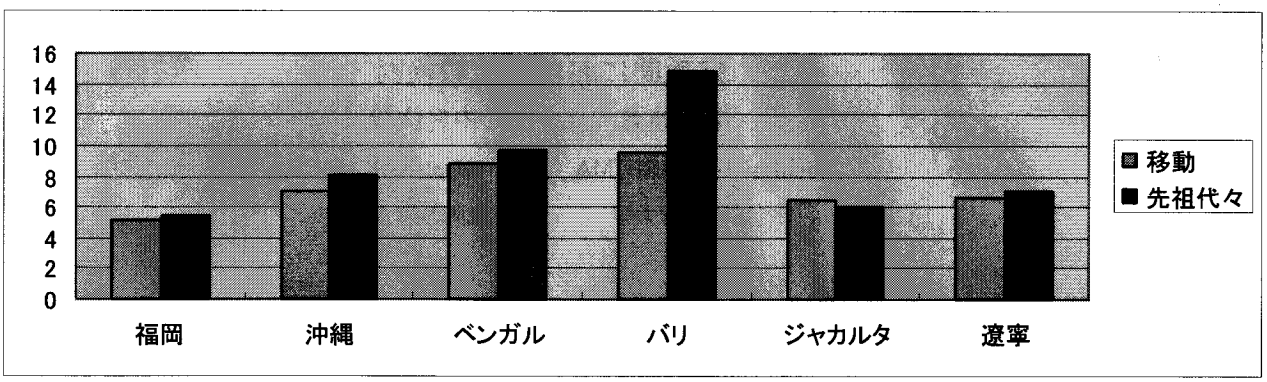


グラフ６　移動と輪廻

委任シャーマニズム

世界的に見て、委任シャーマニズム尺度は、移動する人々は低くなることが分った。シャーマンとのつながりは、移動によって絶たれる傾向があるということである。ただし、ジャカルタだけはここでも別の動きをした。F(1,1023)=16.4***

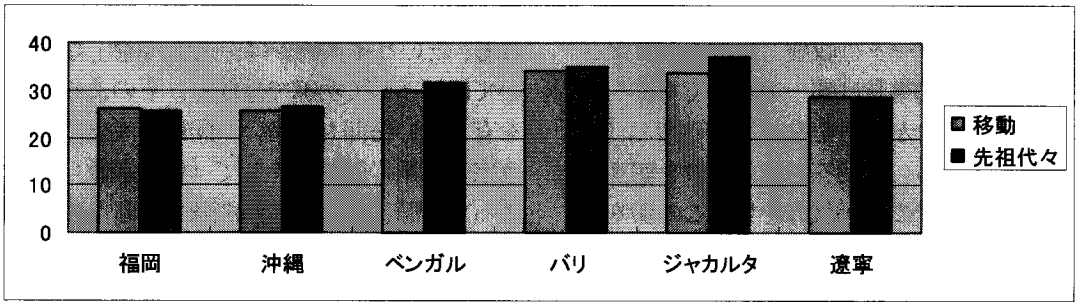
ちなみに、変容シャーマニズムは、移動とは関連がなかった。



グラフ７　移動と委任シャーマニズム

相互協調性尺度（SCS６）

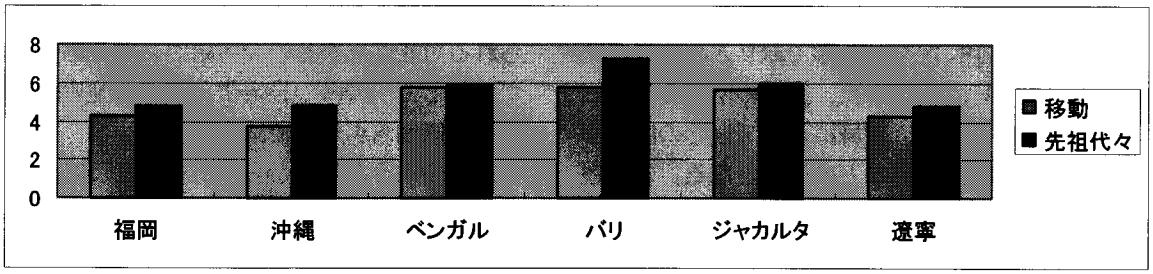
移動している人々の方が、相互協調性は低くなる傾向が世界的にあるが、福岡はそうでもない。F(1,1006)=7.21**



グラフ８　移動と相互協調性

死への態度尺度（DAPR）：回避

移動している人たちほど、死への回避尺度の項目が世界的も低く出る。移動している人ほど死を避けない、心理的に回避しないということである。F (1, 100)=13. 71***



グラフ９　移動と死の回避

このように、特にバリ島における文化接触が緊張を生む可能性を示唆している。この状況故に、シンクレティズムが否定され、お互いの宗教が区別される傾向があるものとも考えられる。

14章　宗教間寛容態度および終末観についての地域間および宗教間における比較検討

中島義実　　中村俊哉
Yoshimi NAKASHIMA　　Shunya NAKAMURA
福岡教育大学　　福岡教育大学

問題と目的

中村・中島・倉元・中村・アンタルティカ(2005)による死生観と死別体験の国際比較研究を承けて、質問項目中の「シンクレティズム態度尺度」および「終末論尺度」について、地域間及び宗教間の視点から比較検討を行う。

一連の研究は、比較文化的研究であるが、相互比較するおのおのの地域の文化内にも多層性をみとめる視点から行われている。すでに中村(2004, 2005)のインタビュー法による研究が、この視点からのデータの収集と分析としてなされている。文化的事象は同一地域内でも切り口によって様々な分かれ方をみせる。今回は、「個人的に信じている」と回答された宗教を切り口として、地域内での分かれ方を見、この切り口を地域間で相互比較することを試みる。

また同時に我々の研究は、死生観を捉えるときに重要な要因のひとつとなる宗教についても、多層性をみとめる視点から行われている。ある既成の宗教が伝播するということひとつをとってみても、教義の全てが伝播した地域に根を下ろすとは限らない。むしろそれまでその地域にあった様々な信仰や風土などからの再解釈、取捨選択（意識的であれ結果的であれ）などがなされ、何らかに混交した形で取り入れられていることも多い。それゆえ、同一の宗教を信仰していると称しても、地域によって信念の内容や強く意識される力点などは様々となる。この様子を捉えてみることをも試みたい。

以上の目的から、まず「シンクレティズム態度尺度」についての検討を行う。この尺度は、シンクレティズムの諸現象の中では日常的・世俗的・意識的なものを問う項目群からなり、一部「エキュメニズム」とする方が近いような事項も含むが、上述の、同一宗教に対する地域による信念の内容や強度の異なりに関する、基礎的なデータの一部を提供するものと考えられる。

他方の「終末論尺度」は、終末観に関するものであり、我々の研究全体の中では「死後観」や「死体の処理」などとの関わりで採用された尺度でもある。他方で上述の視点からみるとき「終末観」は、個々の宗教の信念体系の中でも教義性の高いものであろうと仮定できる。世の中全体が単一の時間的方向軸に向かって流れており、それをコントロールする絶対者がいて、ゴールの時点で決定的な裁定および救済がなされる、というイメージは、「原始宗教」などにおいてはけっして明瞭ではなく、そのような観念を有しない信仰も数多い。国家の成立にともなう宗教体系の展開、そして「世界宗教」などによって明瞭に教義化され洗練されるものとされる。したがって、個々の宗教の伝播の結果としての現時点における、信念の強弱について、教義との距離の大小で捉えやすいものであるとみられる。

もっとも他方で、地球環境問題など科学文明の行き詰まり感等から「人類の危機」としての「終末感」が現代において増している可能性もあり、この場合、教義との距離関係が必ずしも近くはないところでの、終末観の強さとしてみられる可能性もあるので考慮が必要である。ただこれとて一神教の世俗化からくる歴史観の一展開の側面ももつのではある。

以上のような目的から、上述の2尺度についての地域間および宗教間での比較を試みることとする。

方法

中村ら(2005)の質問紙データのうち、福岡、沖縄、ベンガル、バリの4地域それぞれにおいて、「個人的に信じている宗教」の回答カテゴリー人数が総被験者の5％以上を占めたカテゴリ

一に属する被験者を対象とした。すなわち、福岡では仏教(25.2%)・なし(58.4)、沖縄では仏教(5.7%)・キリスト教(7.7%)・その他(5.3%)・なし(69.9%)、ベンガルでは仏教(7.1%)・ヒンドゥー教(75.0%)・なし(9.0%)、バリではキリスト教(8.8%)・イスラム教(11.3%)・ヒンドゥー教(75.0%)、と回答した被験者のデータを対象とした。また、十分な被験者数は得られていないが、ジャカルタにおいて同じ質問紙を用いて得られたデータを、同様の手続きによって参考として分析した。

それぞれの地域ごとに、「シンクレティズム態度尺度」および「終末論尺度」の尺度値と項目値について、宗教による比較を行った。また、各尺度値については性差も検討した。

結果

「シンクレティズム態度尺度」の尺度値について、地域ごとに宗教別の値を比較して表1および図1に示した。各地域内の比較で統計的に有意差のみられた箇所について表の下に示した。参考のために、地域内の被験者全体の尺度値を中村ら(2005)から表1および図1に転載した。なお、宗教と性別の二要因の分散分析を行ったところ、福岡においてのみ、性別の主効果（男性(15.9)＜女性(17.5)。F(1,175)=13.3**）と交互作用（F(1,175)=8,1**。仏教において、男性(12.1)＜女性(16.7)）がみられた（なお、福岡の被験者の年齢構成をベンガルやバリと近似させるために２０代以下にしぼって同様の分析を行っても、交互作用こそみられなかったが、宗教の主効果（仏教(14.8)＜なし(17.8) F(1,69)=10.9**)と性別の主効果(男性(16.3)＜女性(17.6) F(1,69)=4.5**)がみられた)。

表１　「シンクレティズム態度尺度」（ＳＣＴＳ）の尺度値の比較

	仏教	キリスト	イスラム	ヒンドゥー	その他	なし	全(注)
福岡	15.2					17.7	16.9
沖縄	15.8	15.2			17.4	16.7	16.6
ベンガル	18.6			18.1		19.4	18.2
バリ		14.4	11.7	16.5			15.7
ジャカルタ		15.9	8.6				

福岡：仏教＜なし (F(1,175)=21.3**)
バリ：イスラム＜ヒンドゥー (F(2,140)=7.7**)
ジャカルタ：キリスト＞イスラム (F(1,39)=30.7**)
(注)地域内の被験者全体

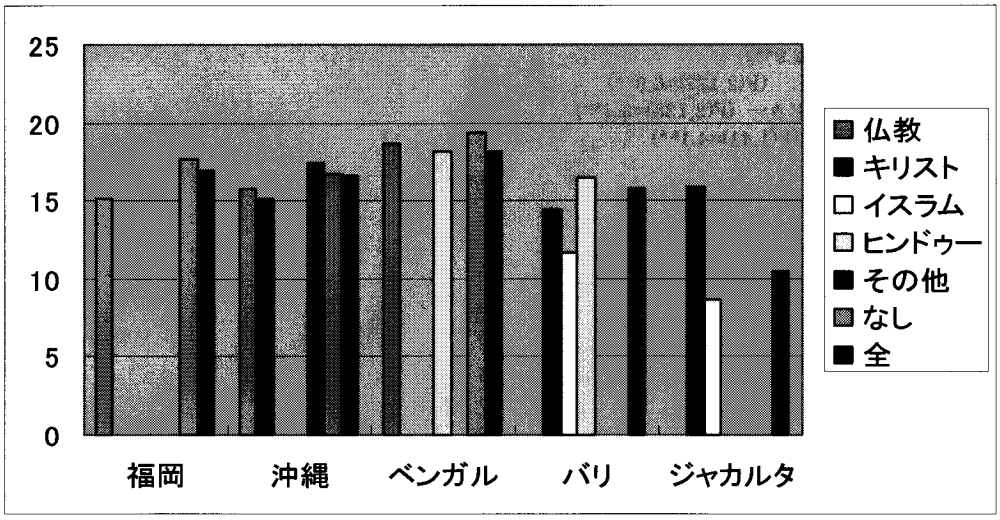


図１　「シンクレティズム態度尺度」の尺度値の比較

「シンクレティズム態度尺度」の各項目値について、地域ごとに宗教別の値を比較して表２に示した。各地域内の比較で統計的に有意差のみられた箇所について表の下に示した。

表２　「シンクレティズム態度尺度」（ＳＣＴＳ）の項目値の比較

	福岡		沖縄				ベンガル			バリ			ジャカルタ	
	仏教	なし	仏教	キリスト	その他	なし	仏教	ヒンドゥー	なし	キリスト	イスラム	ヒンドゥー	キリスト	イスラム
SCTS1	2.9	3.6	3.1	2.7	3.8	3.2	3.6	4.0	4.5	3.2	1.9	3.4	4.3	1.8
SCTS2	2.5	3.0	2.9	2.9	2.7	2.8	4.1	3.9	4.2	2.8	2.3	3.2	3.2	1.5
SCTS3	3.2	3.8	3.2	3.3	3.5	3.5	3.8	3.7	4.4	2.5	1.5	2.8	2.9	1.2
SCTS4	3.4	3.7	3.7	3.4	3.8	3.6	4.5	3.3	3.4	3.9	3.9	4.5	3.1	2.6
SCTS5	3.2	3.6	3.0	2.9	3.6	3.6	2.6	3.2	2.9	2.0	1.8	2.5	2.4	1.6

福岡：SCTS1, SCTS2, SCTS3, SCTS5　仏教<なし (F(1,176)=12.3**,5.5**,11.6**,5.5**)
沖縄：SCTS5　キリスト<なし (F(3.187)=3.1**)
ベンガル：SCTS4　仏教>ヒンドゥー,なし (F(2,131)=6.4**)
バリ：SCTS1, SCTS2, SCTS3　イスラム<ヒンドゥー (F(2,141)=7.1**,3.1**,6.7**)
　　SCTS4　キリスト･イスラム<ヒンドゥー (F(2,140)=2.7**)
ジャカルタ：SCTS1, SCTS2, SCTS3, SCTS5　キリスト>イスラム (F(1,41)=23.8**,19.5**,31.6**,3.4**)

「終末論尺度」の尺度値について、地域ごとに宗教別の値を比較して表３および図２に示した。各地域内の比較で統計的に有意差のみられた箇所について表の下に示した。参考のために、地域内の被験者全体の尺度値を中村ら(2005)から表３および図２に転載した。なお、宗教と性別の二要因の分散分析を行ったところ、福岡においてのみ、性別の主効果（男性(15.1)<女性(18.2) F(1,172)=12.7**)）がみられた。

表３　「終末論尺度」（ＥＳ）の尺度値の比較

	仏教	キリスト	イスラム	ヒンドゥー	その他	なし	全(注)
福岡	17.1					16.4	17.7
沖縄	20.3	22.5			18.9	17.2	18.5
ベンガル	26.8			24.5		17.7	24.5
バリ		34.8	28.3	28.7			29.1
ジャカルタ		35.4	31.8				32.7

沖縄：キリスト>なし (F(3,182)=2.9**)
ベンガル：仏教・ヒンドゥー>なし　(F(2,127)=6.9**)
バリ：キリスト>イスラム・ヒンドゥー (F(2,138)=3.4**)
ジャカルタ：キリスト>イスラム (F(1,41)=4.1**)
(注)地域内の被験者全体

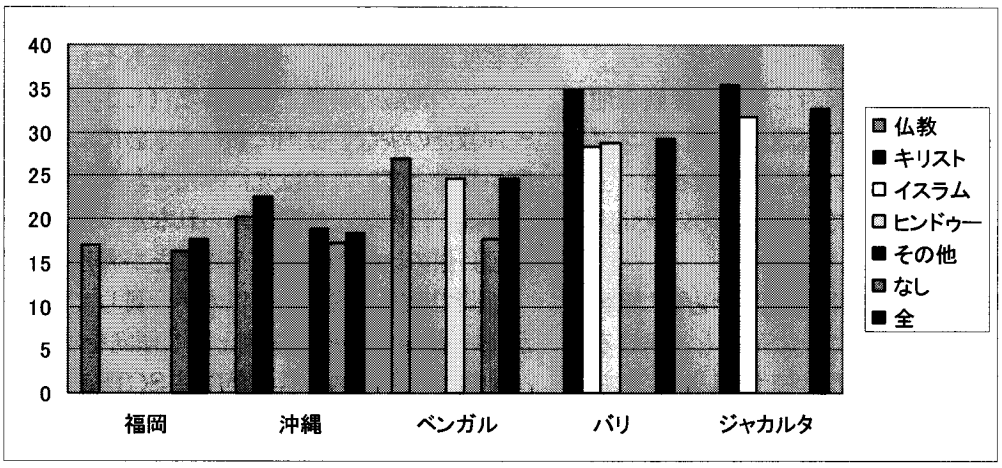


図２　「終末論尺度」の尺度値の比較

「終末論尺度」の項目値について、地域ごとに宗教別の値を比較して表４に示した。各地域内の比較で統計的に有意差のみられた箇所について表の下に示した。

表４　「終末論尺度」（ＥＳ）の項目値の比較

	福岡		沖縄				ベンガル			バリ			ジャカルタ	
	仏教	なし	仏教	キリスト	その他	なし	仏教	ヒンドゥー	なし	キリスト	イスラム	ヒンドゥー	キリスト	イスラム
ES1	2.2	2.4	2.5	2.2	2.2	2.3	2.6	2.4	2.2	4.1	4.3	3.1	4.5	4.8
ES2	2.3	2.3	2.4	2.2	2.2	2.2	2.8	2.8	2.5	3.9	3.0	2.9	3.9	3.8
ES3	2.1	1.3	2.1	3.0	1.9	1.5	3.4	2.7	2.1	3.9	2.0	3.5	4.5	2.3
ES4	1.6	1.4	1.8	2.5	1.5	1.4	3.6	3.3	2.7	4.4	4.3	4.1	4.1	4.7
ES5	1.9	2.1	2.4	2.2	2.0	1.9	3.1	2.7	1.9	3.5	4.0	2.9	4.6	4.3
ES6	1.9	1.7	2.4	2.2	1.8	1.7	2.6	2.5	1.6	2.6	2.3	2.8	2.5	2.8
ES7	2.7	2.5	2.9	3.0	3.6	2.7	2.2	2.4	1.6	3.0	2.6	2.8	2.6	3.3
ES8	1.7	1.5	1.9	2.4	2.0	1.7	3.2	3.0	2.2	3.4	2.5	3.1	4.4	2.8
ES9	1.7	1.5	1.7	2.7	1.5	1.6	3.5	2.9	2.1	4.6	3.0	3.7	4.3	3.2

福岡：ES3, ES4　仏教＞なし（F(1,174)=37.2**,4.1**）
沖縄：ES3, ES9　キリスト＞その他・なし（F(3,180)=9.6**, F(3,178)=4.7**）
　　ES4キリスト＞なし（F(3,181)=4.9**）
ベンガル：ES3　仏教＞なし（F(2,132)=4.0**）
　　ES5, ES6, ES9　仏教・ヒンドゥー＞なし（F(2,133)=4.1**, F(2,131)=6.0**, F(2,131)=5.6**）
　　ES7, ES8　ヒンドゥー＞なし（F(2,132)=3.4**, F(2,130)=3.9**）
バリ：ES1　キリスト・イスラム＞ヒンドゥー（F(2,141)=10.6**）
　　ES2　キリスト＞ヒンドゥー（F(2,141)=4.1**）
　　ES3　キリスト・ヒンドゥー＞イスラム（F(2,141)=12.1**）
　　ES5　イスラム＞ヒンドゥー（F(2,139)=7.8**）
　　ES9　キリスト＞イスラム・ヒンドゥー（F(2,140)=7.3**）
ジャカルタ：ES3,ES8,ES9　キリスト>イスラム（F(1,41)=16.9**,14.0**,4.5**）

考察

1．シンクレティズム尺度

まず、中村ら(2005)で検討した、尺度値の地域間比較を確認しておく。福岡、沖縄、ベンガルで高く、バリが低いという結果であった。

このうち、福岡とバリで、地域内の宗教間比較で有意差がみられた。

福岡は地域間比較では宗教間混交現象に寛容とみられていたが、宗教ごとにみると、信じる宗教なしの場合は確かに尺度値が高いが、仏教を信じているとする者はそれほど寛容ではない。日本人は宗教間の混交に寛容であるとする一般イメージがあるが、個人の信仰によって一概にそうとは言えない可能性が示された。また、日本における仏教信仰の存在感や影響性についても、あまり大きくはないという一般イメージがあるかもしれないが、宗教なし群との間に差がみられ、仏教群の方が寛容度が低かったことから、仏教信仰を表明する者にとっての仏教は、それ以外の者にとってよりも、明瞭な存在感があることが示唆された。信仰する群で寛容度が下がるので、日本の仏教が他宗教に寛容であるとも言いきれないことになる。信仰を表明するということは何らかにコミットすることなのであるから自然なことでもある。特に、他地域ではみられなかった交互作用（性別の主効果については後に終末観と併せて考察する）から、男性においてこれらのことが強く言えることになる。日本の多神教的風土において、言語的意識で理性的コミットとして信心を言明することが少ないとすると、だからこそ逆に、日本においてあえてある宗教を「信じる」と回答した者は、言語理性的にコミットする傾向が多少なりとも際立つ者であり、宗教間を分節化して捉える傾向が相対的には強くなっているのかもしれない。

バリについては、他地域より寛容度が低かったことについて、イスラム教の影響が考えられていた。今回の結果でも、イスラム教が、特にヒンドゥー教に対して有意に低いという結果となった。ただしヒンドゥー教群自体も、ベンガルより寛容度は低くなっている。なお、イスラム教における寛容度の低さは、ジャカルタではさらに際立っている可能性がある。

他方でベンガルは、どの宗教群もおしなべて寛容度が高かった。一神教徒がそもそも少ないのがこの地域の特徴でもあった（しかし同様に一神教徒の少ない福岡において宗教による寛容度が異なっていたのは先にみたとおりである）。

沖縄では明瞭な特徴はみられなかった。

項目値の比較からは以下のことが考察される。

福岡では項目 SCTS４以外が一貫して仏教群が低い傾向にあり、尺度値と同じ傾向を示した。

沖縄ではキリスト教群が項目 SCTS5 で「宗教なし」群より有意に低かった。一神教ではあるが「七五三で神社に行く」などのこと以外についてはさほど非寛容ではない。さほど非寛容ではない点と、しかし儀礼では区別する意識がある点が興味深く、欧米などのキリスト教徒と比べてどうであるのか、検討が待たれる。ちなみに後述するバリのキリスト教徒との比較も考えられるが、中村ら(2005)で確認したように、この項目 SCTS５についてはインドネシア語版では、「七五三」の部分を「その子供が違う宗教でお祝いされる」となっているため、宗教を区分する意識が他の地域よりも刺激された結果の反応となっている可能性があり、実際どの宗教を信じる者でも、この項目が最も低い傾向は一致している。この関係で、単純比較はできない。

ベンガルでは項目 SCTS4 にのみ特徴がみられた。この項目については後述する。

バリでは項目 SCTS5 以外では、イスラム教群がヒンドゥー教群より低い結果となり、尺度値と同一傾向であった。また項目 SCTS４についてはキリスト教群もヒンドゥー教群より低い結果となった。参考までにジャカルタでは、SCTS４以外で、イスラム教群がキリスト教群より低い可能性がある。SCTS４も、バリに比べて、イスラム教が低い傾向にあるかもしれない。

さてこの項目 SCTS４「中央の宗教の教義に合わせるのでなく伝統文化のやり方を残すことに賛成する」は独特の反応をみた項目である。福岡では他の項目で「なし」群より寛容度の低かった仏教群が、この項目では差がみられなかった。他方ベンガルでは、他の項目では宗教間差がみられなかったのに、この項目に関しての

み、仏教群が他より高い結果となった。仏教という宗教の、在地伝統文化への寛容さや包摂可能性を示すと考えてよいであろうか。他方でバリの結果をどう考えるか。地域内で、キリスト教群とイスラム教群がヒンドゥー教群より低かったのは、一神教のもつ教義や象徴の集権性・統制性と考えてもよいかもしれない。ただし、地域間でみるとき、バリは他地域より全体としてこの項目値が高く、キリスト教群やイスラム教群も、ベンガルの仏教群以外の値と同等ないしは上回っている。中村(2005)によればシンクレティズムをかなり強く否定するイスラム化が進行しつつあるインドネシアであるが、バリにおいては地域の伝統を残す意識が強そうである。参考として検討しているジャカルタのデータではこの値が低い（他のどの地域よりも低い可能性さえある）ことから、バリの地域性、ひいてはインドネシアにおける中央と地方との関係も影響している可能性が考えられる。この点については、中村のインタビュー調査でも、バリのキリスト教徒やイスラム教徒からはまだデータが得られていないことから、日常儀礼や行事なども含めた今後の調査が待たれるところである。

2．終末論尺度

こちらもまず尺度値に付いて検討する。

先に行った地域間比較では、ベンガルとバリが高く、福岡と沖縄が低いという結果が得られていた。

このうちベンガルの宗教間比較では、信仰をもつかどうかが高低を分け、「宗教なし」群では、日本の２地域と同程度の値となった。

バリは全体として高いのであるが、キリスト教群の高さが際立っていた。同じく終末論的教義をもつ一神教であるイスラム教群が、キリスト教群ほどには高くなかったのが興味深い。この傾向はジャカルタでも一致していると思われる。これらについては項目値で検討する。

沖縄ではキリスト教が「なし」に対して高く、自然な傾向とみられるが、仏教がキリスト教に対して明確に差があると言えなかった点も注目される。

福岡では宗教間の差はみられず、性差がみられた。先にみた「シンクレティズム態度尺度」においても福岡でのみ性差がみられた。これはいかなることであろうか。男女における信念の傾向の相違がみられたのが福岡だけであったことをどう考えればよいであろうか。ここでまとめて考察しておきたい。世俗化が進行し、人々の意識的態度に対する宗教の影響性が後退したからであろうか。宗教の影響が後退したとき、終末観や他宗教への寛容度は、個々人の時代感覚や宗教的感性に左右される度合いが増し、そのひとつとして性別による相違が前面に出るのかもしれない。この場合、女性の方が終末意識を感じやすく、混交に対してはより寛容となることを示す結果となったと解することができる。もっとも、信仰する宗教をもたなくなることで寛容さの増す程度は、男性の方が高い。この点については世俗化の影響は男性に強く出やすいのかもしれない。信仰をもつときの寛容さの低さや終末感の低さから、男性の方が言語的理性に依拠しようとする態度をもち、世俗化の影響がここに出やすいということであるようにも考えられる。女性の宗教感覚は男性ほどには世俗化に影響されにくいのであろうか。いずれにせよ、このような差が前面化したのは福岡のみであった。

次に項目値について検討する。

福岡で、項目ES３，４について仏教群と「なし」群に差がみられた。ES3「終末に救われる人がいる」ということ、ES4「終末を決定する絶対者がいる」ということ、という救済感は仏教群が高いというより「なし」群が低い。信仰をもっていないわけであるから自然でもある。その他の、終末の切迫感や確信感のようなものは「なし」群と差がなく、仏教群全体として終末感がさほど強くないと言える。

沖縄でも仏教には同様の傾向がある。キリスト教はさすがに、ES3「救われる者」、ES4「決定する絶対者」、およびES9「救済者の来臨」で特色を出しているかにみえるが、仔細にみれば、ES3「救われる者」とES4「絶対者の決定」については、「なし」群などが低いからの結果でもあり、福岡と似ている。ES9「来臨」については他に対して明らかに高いと言える。逆に言

えばキリスト教の根本教義の色が強く出ているのはこの項目だけとも言える訳で、キリスト教としては沖縄でのそれはマイルドな方の終末感でもって信仰されているようにみえる。

ベンガルでは宗教による特色が出ている。ES5「終末が近く来る」、ES6「予言を信じる」、ES9「救済者の来臨」については「なし」群が低いため、信仰をもつ2群が高く出ている。仏教にのみ高く出たのが、ES3「救われるが人いる」、である。ヒンドゥーにのみ高く出たのは、ES7「終末が怖い」、と、ES8「終末は世の矛盾救済の日」、である。ヒンドゥーは仏教ほどには救済色が強くないわけである。先行して行った他の尺度の地域間比較でも、ベンガルでは人と神的存在との間の超絶感が強く、このことと、ベンガルのヒンドゥーのこのような終末感（世としては矛盾の救済であるが、個人的には怖くもある）とは関係があるかもしれない。

バリについてはまず、どの宗教でも終末感はおしなべて高いということを言わねばならない。同じヒンドゥーでもベンガルよりも高い値が並び、同じキリスト教でみれば値は沖縄の比ではない。しかし、宗教間での高低強弱は、項目によって複雑に異なりをみせる。キリスト教は、ES1「終末を迎えるのは近い」、ES2「天災は前兆」、ES3「救われる者」、ES9「救済者の来臨」、において高い方に入り、他の項目でも、他の宗教より低いということがない。教義色が明快に出ているとも言える。ヒンドゥーは、ES1「終末を迎えるのは近い」、ES2「天災は前兆」、ES9「救済者の来臨」などで低く出ているが、全てで低いわけではなく、ES3「救われる人がいる」、では高い側に入る。この項目はベンガルのヒンドゥーでは高くなかっただけに、同じ宗教でも地域による異なりがあるところとして注目される。

そしてもっとも注目されるのは、イスラム教である。同じ一神教ということでキリスト教と似た結果となるかというとそうではない。ES2「前兆」についてキリスト教のように高くはなく、ES9「救済者の来臨」についてはヒンドゥー教とともに低く、ES3「救われる人がいる」についてはヒンドゥーよりも低い結果となっている。

これらについて、まず、ES3「救われる人がいる」について低いのは、この項目が「信仰による救い」としているからかもしれない。イスラム教では信仰とともに行いが重視される。行いの重視が前面に出ないと彼らはその項目には賛成しないのかもしれない。ES9「来臨」については、イスラム教においては終末は「審判」の色彩がキリスト教よりもかなり強いということが言えるかもしれない。そして、キリスト教では信仰によって裁きを免れる「救済」であるのに対し、イスラム教では行いも含めて審判されて結果を申し渡されることになる。また、キリスト教では救済者の側からこの世に来臨するが、イスラム教では人が神の前にひとりずつ呼び出されるイメージが強いかもしれない。これらの項目はジャカルタでも同傾向となっていると思われ、イスラム教の特徴とみてよいであろう。この意味で今回の終末論尺度は、キリスト教的であったと言えるかもしれない。

ES2「前兆」意識が高くない割には、ES1やES5のように「終末が近い」意識がもっとも強いのもバリのイスラム教徒である。イスラム教では、終末は突然おとずれるものと観念されているところはたしかにある。全く神の思し召しひとつであるから、人が前兆を云々できることとして観念されにくい可能性もある。全体として、キリスト教以上に、神の超絶性、神の意思や選びや判断の絶対性が際立つ信仰として表れているとみられようか。もっともジャカルタのイスラム教徒においては、ES2の前兆意識はかなり高くなっている。他の項目やシンクレティズム尺度からは、ジャカルタのイスラムの方とバリのイスラムとでは、もとの教義に対する純度はジャカルタの方が高いように思われる。そう考えると、むしろバリにおける神観念の超絶性は、ヒンドゥーからの影響とも思われる。

3．総合考察

あらためて地域それぞれの特徴を考察してみる。

福岡では、他地域にみられなかった性差がみられ、世俗化との関係が考えられた。とはいえ

仏教への信仰表明のもつ影響性も強いとはいえないがみられた。

沖縄では宗教間の特徴があまり際立たず、キリスト教もマイルドなあり方で信仰されていた。

これらの点は首都圏や関西、東北などではどのようになるであろうか、興味深い。

ベンガルでは宗教間の寛容さが高く、信仰をもつ者ともたない者の間、また宗教間で、教義に関連する相違が、日本よりは出ていた。

バリではさらに教義の特徴がよく出ているが、宗教間の寛容さはベンガルほどには高くない（項目 SCTS5 における翻訳の問題もあるが、それを差し引いても異教異宗派を区別する傾向はみられた）。これは、ベンガルにはなかった一神教徒の影響ともみられるが、非一神教徒でも似た傾向はあった。中村(2005)で考察されたように、バリにおいては「サンヒャンウディ」という一つの神イメージの共有など、一神教親和的なところがあるのかもしれない。ちなみにジャカルタではキリスト教徒とイスラム教徒との間で寛容度の異なりが大きい可能性があり、バリのような共有する神イメージが希薄であろうこととの関係も想定される。他方、バリではまた、地域文化重視色も強い。この点ジャカルタでは地域文化重視色はかなり弱い可能性があり、寛容度の問題は伝統遵守との関係もあるかもしれない。インドネシアにおけるバリという地方の位置づけや、インドネシア自体における中央と地方との関係性などと併せて考察を重ねる必要がある。

同じ宗教名でも地域による信仰のあり方が違ってくる様子も見出された。

仏教は福岡では、寛容度を低める作用をもっていたが、ベンガルではそのようなことはみられなかった。むしろ高い項目もあった。終末感はベンガルの方が高かった。福岡の仏教の終末観が一般的な救済理論に近いそれであるのに対し、ベンガルのそれは切迫した現実感をもつものであった。

ヒンドゥーは、寛容さにおいてはベンガルでもバリでも似た様相であった。終末感はバリの方が高かった。ところがバリではより高い終末感をもつ一神教の存在があるので、ヒンドゥーの終末感はバリの中では低い方になる。逆にベンガルの中ではヒンドゥー教徒は終末感の高い方となる。また、バリのヒンドゥー信仰はベンガルのそれよりも救済色を有しているようにもみえる。共通しているのは終末への恐怖感かもしれない。

イスラムについては、バリの方が、ジャカルタよりも、ヒンドゥーや地域文化のような、先行する宗教文化事象の影響を受けている可能性が示唆された。

以上のように、地域によって宗教間の差異のみられる程度が異なっており、みられるあり方も異なっている。また、同一の宗教でも信心において強く意識される点に異なりがある。今回、宗教間混交や終末観という、意識的・言語的教義性の際立ちやすいことがらについてみた結果でさえこのようであった。まして、より日常的慣習のようなことになっていくほど、同一の宗教の地域による異なりが幅をもってみられてくるであろう。そのような意味で、一連の研究で得られてきたデータについて、今回指摘された点も補足しつつ、なお詳細な分析が必要である。そこからまた、再度現地で聞き取っていかねばならない課題も見えてくることと思われる。

文献

橋爪大三郎　2001　世界がわかる宗教社会学入門　筑摩書房

中村俊哉　2004　南アジアの死生観　インタビュー法から　福岡教育大学紀要，第 53 号，第 4 分冊，247-263

中村俊哉　2005　インドネシアの死生観：バリ，ジャカルタ，ジョグジャカルタにおけるインタビューから　福岡教育大学紀要，第 54 号，第 4 分冊，199-221

中村俊哉・中島義実・倉元直樹・中村幸・イ　カデ　アンテルティカ　2005　死生観と死別体験の国際比較：福岡，沖縄，ベンガル，バリの比較から見えるもの　福岡教育大学紀要，第 54 号，第 4 分冊，223－240

小口偉一・堀一郎（監修）　1973　宗教学辞典　東京大学出版会

15章　刺激語としての宗教ー宗教学の立場から予想される疑問に関する補遺

中島義実

我々の研究は、死生観が地域や文化によって異なっていたり、変容していたりするさまを記述し理解するために、比較という方法を用いるものであった。心理学者と福祉学者がこれにあたってきたが、宗教学との関係は常に意識されていた。共同研究者のひとりは、学部生時代に宗教学を専攻していたことや神学の修得に備えていた経歴をもつことなどもあって、この研究に加えられた。

しかしあらためて宗教学との関係を考えてみるときに、我々の研究について、いくつかの留保や弁明も必要であるように思われる。本稿はそのために記されるものである。

冒頭に記した、「我々の研究は、死生観が地域や文化によって異なっていたり、変容していたりするさまを記述し理解するために、比較という方法を用いるものであった」の一文を、宗教学者が読むならば、「これも十分宗教学ではないか」と感じられるものと思われる。

にもかかわらず、中村・倉元・中島（2004）では、「死生観は、宗教とまでは言えないレベルの心理状態であり、文化心理学的に検討すべき問題である」とあるので、ここを宗教学者が読むとき、違和感を覚えたとしても自然なことであろうと思う。この点について、いちどは宗教学を専攻した立場からも説明が必要であると思われた。

そもそも宗教学では、宗教とは何かを明瞭に定義し、定義に該当するかしないかを峻別してからことにあたる、というようなことは、かえって宗教的現象を豊かに捉えきれないことにつながるとされていたように思われる。人間にとって、「宗教的であることにはどのようなことがあるか」「宗教性にはどのような内包がありうるか」、その広がりを捉えようとする姿勢があったと思われる。

その観点からするならば、死生観というテーマは十分に宗教学的なテーマである。宗教の淵源を考える観点からすれば、むしろ中心的テーマのひとつであろうし、そのように扱われてきたと理解する。

それではなぜ、前述のような、違和感を招きかねないような記述をなしたのか。この点について説明不足を認めつつ、以下に補遺を行いたい。

端的に述べれば、このことは、心理学という学問の方法論の特色であり限界でもあろうことに関連すると考える。

同時にこれは、宗教という語が現代において持っている、困難さと可能性とにかかわっていると思われる。

心理学においては、考察の対象とする事象を、「刺激に対する反応としての行動」とすることがひとつの柱となっている。このことにより、考察の対象が、内省力や言語化能力に秀でた主体の営為にとどまらない広範さをもち、人文社会系諸学の中での今日の大衆性獲得につながったと考えることができる。しかし他方で、刺激はあくまで刺激価において扱われるため、個々の刺激そのもののもつ可能性を深めて扱うことが、時として、ともする

と後回しになってしまうきらいもなくはない。

我々が今回行った、インタビューであれ質問紙であれ、こちらの発する言語が刺激となる。特に質問紙においては、刺激がワンストロークとなるために、記された言語が被験者にどのような刺激となるか、そのことをより十分に考えねばならない。

今回の研究では、刺激語としての「宗教」がひとつの問題となった。「宗教」という刺激語を用いて反応を得ようとするときに、先行する心理学研究で見出されていた「宗教への否定的な反応が多く出る」という現象を十分考慮しつつ、インタビューの質問や質問紙の項目をあらためて構成する必要があったのである。

ではなぜそもそも、宗教という刺激語は否定的反応を多く引き起こしてきたのであろうか。この点が、この刺激語の刺激価のもつ特徴であろうと思われるのだが、おそらく大きく効いていると思われるのは、刺激語「宗教」で刺激される心的内容のかなりが、「既成の確立した教義をもつ宗教」「内外の境界の明確な教団をなす宗教」「帰依の有無を（しばしば排他的に）明らかにさせる宗教」に関することであろうということである。

この刺激価問題を考える中で、暗々裏に我々の中にあったのはこのことであっただろうと思われる。「宗教を信じていない人の割合が多い日本でも」という記述に端的に現れている。これはすなわち、既成の宗教への帰属を明確にしていない（する必要を感じない、そういうことを考えたこともない、というようなことも含めて）、という意味である。

したがって、続く一連の研究の中での「宗教」とは、その意味での宗教ということになる。宗教学が対象とするものよりも範囲が狭い訳である。それゆえ、それ以降の文脈において「文化」として言っていることも、宗教学からは、敢えて宗教と分かつ扱いをするものなのだろうかと疑問が出ても自然なことだと思われる。そのとおりである。それらは、宗教学のフレームからも、十分に対象となるし、そうされてきた。他方で我々は、「宗教」を狭く定義せざるを得なかった。それはこの語のもつ刺激価からだったのである。

これらのことは、宗教や宗教性というものが、現代においてもっている、困難さと可能性とを示していると思われる。

宗教学が捉えようとするように、人間において、何らかにでも人間存在を超えたところのことに関する考え、体験、感情といったことが、我々の生と死にとって重要であることは言うまでもないし、それらは古来、「宗教」とよばれるものが扱ってきたものである。

ところが現代の我が国において、「宗教」を刺激語としてしまうと、「既成宗教の教義」「既成の教団」などばかりが連想されて、本当につかみたいところの、「何らかにでも人間存在を超えたことへの考え、体験、感情といったこと」へのアプローチを時に妨げる。

学術用語としてであれば、これらを「宗教性」等と表記して、「宗教」と区別することは可能である。しかしわれわれの企図した調査では、そのような高度な思弁を被験者に行わせることは困難であるし、目的に対して迂遠であり、協力やデータを得られにくい。

それゆえにどうしても当面は、刺激語としては「宗教」を避けつつ、「文化」から切り込むという手順にならざるをえない。

けれどもこれらの追究の行く先には、臨床心理学者河合隼雄などが、最終的に自分たちの営為は、「宗教的」と言うしかないところにかかわっていかざるを得ないだろう、と随所で発言していること（たとえば河合,1992）に通じていくであろう。この可能性を感じるからこその今回の我々の接近でもあったのであり、十分とはいえないまでも宗教学を意識に加えたのはこの点からでもある。

我々の記述には、「(死への）心構え」等と記してあるところがある。これも熟しきらない表現かもしれない。構えさえすれば何とかなる、と考えたかにとられかねない表現であるが、含意はそのようなことではない。心に構えたとおりに物事が立ち現れるものでは全くないのは、臨床心理学の範囲においても明らかである。むしろ、そのようなことを対象とすることから臨床心理学ははじまってさえいる。とはいえ、立ち現れにおいて感得されたものを、「語り」として我々が手にする時点となると、その人なりの「構え」が大きく関わるのは事実である。被分析者の「語り」をいかに聴くか、ということから始まった（いわゆる深層心理学派の）臨床心理学の問題意識はそのように切り結ぶ。「語り」から「構え」を探求し、体験とその影響性とを吟味する。そこからひるがえって自己や人間存在への洞察に対する寄与をもくろむ。そのような含意における「構え」であるのだと説明しておきたい。そして、「死」という、やはり、人間存在を何らかにでも超えたところから来たるものに出会って、何をいかに体験するのか、そこからいかなる語りが発せられ蓄積されるのか、そういうところに向かおうとしているのである。その意味では、我々もやはり宗教のあつかってきたところに接近しようとしているのであるし、その自覚を深めねばならないと思う。

シンクレティズムを例にとっても、われわれの手つきはやはり未熟であろうと思う。われわれは、シンクレティズム的現象の、ある一部（それもかなり世俗的現象に近い）について、その「意識的な」「態度」を問うた。けれどもそもそもシンクレティズム的現象が生じる現場では、「そういう態度が宗教の融和にとって望ましいから習合的儀礼を行いましょう」などと思って行っている限りではないのは言うまでもない。シンクレティックに立ち現れてこざるをえない事象に出会って、意識が否定しようとそれが訪れてしまうがゆえに信仰をなし、融和どころか迫害に遭い続けた宗教者を、われわれとて知らないわけではない。名もなきひとびとの間からいつともなく始められたシンクレティックな事象についても、体験の深浅をなおさら簡単には考えられない。

それでもわれわれとしては、接近を開始するにあたっては、日常的意識で言語化されるものとして、態度からとするよりはなかった。始源においてどのような体験に根ざすにしても、現代の日常に残されている形の慣習等をまずは刺激として、日常的意識における態度から開始したのである（もっとも、態度を捉えることに限っても、我々の視角には、さらなる広がりが必要であろう。その意味ではシンクレティズムの宗教性への理解も深めねばならない。ひるがえって、現代の日常の慣習が、世俗化による宗教の希薄化から、ある種安易にシンクレティックな様相を呈している部分もあるはずであり、この点も検討が必

要である。他方で様々なゲームやアニメなどにおける諸宗教や諸民俗由来の象徴の混交によって、こどもたちや青年たちが体験している心的次元も意識せねばならない)。

日常的意識から接近をはじめたのは、心理学や福祉学を足場にしていることへの自覚も失いたくない、ということとも関わっている。前述した河合の思想でも「かかわっていかざるを得なくなる」と表現されることが多いのを覚えておきたい。「すすんで関わっていこうとする」のではなく、心理学なら心理学の足場から、心理学の対象に接近しつづけていった結果、必要が生じてきたのでかかわっていく、というプロセスもおろそかにしたくないのである。

さて最後に、このような補遺を必要としたそもそもの問題に、今一度立ち返っておきたい。「宗教」という語のかかえる困難さが、ことのはじまりなのであった。そもそもなぜそのようなことになってしまったのか。中沢新一(1989)は端的に言う。「神的な事柄」は少しも失われてはいないのに、それにたいする認識を独占していると称する宗教が、それについてあまりにもごまかしにみちた表現ばかりつづけてきたので、心ある人々はそれが確実であってほしいという要求も、それにたいする信用も、今ではすっかり失いかけている、と。そのとおりなのかもしれない。「宗教」という語はそうして袋小路に入っている。けれども「神的な事柄」は失われてはいない。われわれはごく一部にしか過ぎないが、それらのかけらを宗教による認識独占の僭称を免れたところから取り出したかったのである。中沢は先の文脈で「厳密な表現－それこそが重要だ」とも言う。ここが我々にも大きな課題である。我々の未熟さは、あるいはとてもこのことにはおよぶべくもないのかもしれないが、今ある位置で、少しでも前進を企てることができれば、と考えている。

文献

河合隼雄　1992　心理療法序説　岩波書店

中村俊哉・倉元直樹・中島義実　2004　死生観国際比較のための尺度作成について　－日本における祖先対話，輪廻，日常的シャーマニズム－　福岡教育大学紀要，第53号，第4分冊，265－280

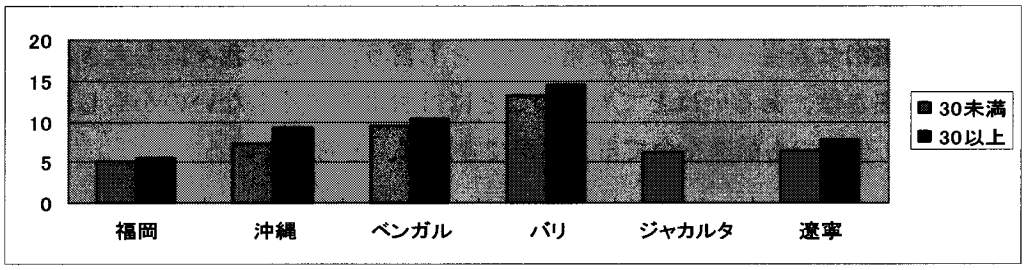
中沢新一　1989　蜜の流れる博士　せりか書房

１６章　時代の変化と死生観の変容

中村俊哉

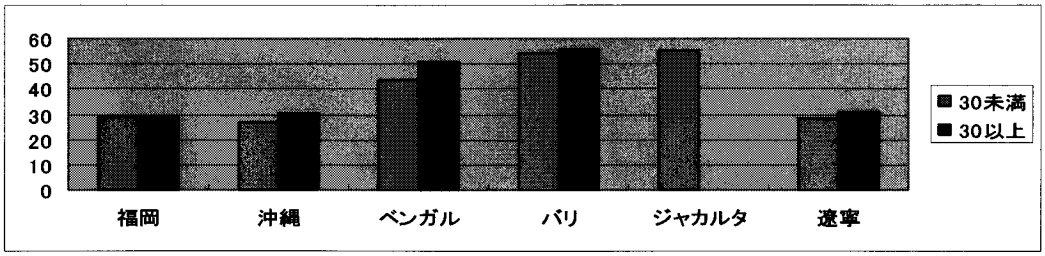
30 代以上とそれ未満との比較から、死生観の変容を類推することを目的とする。ただし、ジャカルタは学生中心であるためこれは出来ず、ベンガルのデータも 30 代以上は少数であることはお断りしておく。

空想対話尺度は、年齢と関連しなかった。F(1, 1075)=0. 01n. s.
スピリチュアリティ尺度は、30 代以上の方が、多くの地区で高くなった。福岡では、これは言えなかった。F(1, 1069)=8. 36**
祖先対話尺度は、年齢と全く関係しなかった。祖先との関連が弱まってきたとは言えないことが分る。F(1, 1093)=0. 29n. s.
輪廻尺度も、全体的には年齢と関連しなかった。F(1, 1057)=1. 26n. s.　日本、中国では若い人の方が高い傾向を、インドでは減る傾向を見せているものの統計的には有意ではない。
霊魂尺度も、全体的には年齢と関連しない。F(1, 1064)=0. 03n. s.　日本の若い人にも、霊を信じる人が増えているとは言えない。
変容シャーマニズムは全体としては年齢が高いほど高い傾向がある。F(1, 1077)=3. 81△
ただし、これはインドの若い人に低い人が増えていることを反映していると思われる。
委任シャーマニズムは、全ての地域で年齢が低い人ほど低くなった。F(1, 1067)=7. 46**
これは、全世界的に起こっている現象と言える。



グラフ１　委任シャーマニズムと年齢

空想シャーマニズムには、年齢は関連しなかった。F(1, 1080)=1. 89n. s.
お盆尺度は、年齢と関連しなかった。F(1, 1080)=1. 89n. s.　ただし、インドでは、若い人ほど低い傾向を見せた。
神尺度は、年齢が低い人が低くなった。F(1, 1039)=7. 16**



グラフ２　神尺度と年齢

相互協調性は、ベンガル、遼寧などで 30 代以上の方が高く、全体として有意となった。ただし、日本では違いはない。F(1, 1050)=9. 59**
人生満足度は、全ての地域で 30 代以上の方が高かった。この結果はこの調査をやっていて救われた点である。F(1, 1067)=15. 38***

インタビュー資料

インタビュー1　インド人　40代　男性　コルカタ　日本語　（南アジアの死生観　事例11）

2003年8月4日　最初にテープにとる了解を得る。
(I11-1)どんなことなのかな。(人間が死んだあとのイメージなんですよ)死んだあとのイメージ。難しいですねえ。(まず、○さん、この10年以内に、ご家族とか親戚の方でなくなった方はいらっしゃいますか)それはいるけれど。(近い方では)近い方ですね、そうですね、おばさんとか。(おばさん、それからですね、このインタビューはプライバシーは守りますし、答えたくないものは答えなくても結構です)別に何も隠したいことはないし、なんとか、普通どおり書けばべつに問題ないです。
(I11-2)(人間が死んだあとに、どうなると思いますか)どうなるとおもいますねえ。死んだあと。ちょっと考えたこともないですね。まあ、言葉の問題、生まれたから死ぬと、いうのは分かるんですけど。死んだあとにどうなるって、ちょっと難しいですね。
(I11-3)(それでは、インドでは、人が無くなったあとに、どのように儀式をしますか。お葬式はどのようにしますか)そうですね、ヒンズー教だったらですね、まあ、もちろん火葬ですけど、なんというかな、日本とちょっと違うですね。日本でも火葬とかあるけど、やはり全然違うイメージがあるんですね。誰か亡くなったら、みなすぐその場に来て、泣いたりとか、いろいろな事があるんですけど。
(I11-4)日本ではそういうのあんまりなくて。食べたり飲んだりが多いんですね。食べたり飲んだりするのがある。それはインドで実際ありません。(ふーん)あと場所によって違うのがあるかもしれない。インドも広いんで。地方によって、ちょっとなんというかな、ちょっと違う生活もあるんですけど。基本的に、インドのベンガル地方だったら、それについては結構分かるところが、答えてあげますけど。(はい)
(I11-5)(あの、火葬をしますよね)はい。(それは、川のほとりが多いですか。それとも火葬場が)火葬場があるんですね。実際火葬があって、そこでやって、あとその灰を持っていくと、家のそばに。ちょっと、なんというかな、お墓みたいのつくったりはしますけど。
(I11-6)(川に流すより、お墓に入れる方が多いですか)あの一、川に流すのはですね、インドも広いですから、皆川の所に連れて行くの難しいですよ。その場で川の近くでやっているところが、流す可能性が、ちょこっとぐらいあるんですよ。あるとん<ききとれず>については、ごちゃごちゃやっているけど、本当は、この辺の(おへそのあたり)ええ、おへそが焼けないから、実際ガンジス川に流したら、死んだ人の何というかな、例えば、死んだ人と、でもその人やっぱり落ち着く<ききとれず>(落ち着く？)そういう感じで、やっぱり神様に何か御願いしているという意味になるかな。死んでもこの人、幸せになるとか。ま、誰も見えないけど、でも一言人間の気持ちが。・・
(I11-7)(その、お葬式から何日かたって、集まるようなことはありますか)あります。(いつごろ)昔は1ヶ月だったんですよ。1ヶ月後皆集まって、1ヶ月の間ですね、つめとか、髪とか、○が、全部とらないです。そのまま切らないです。生活も、やはりしっそな<ききとれず>生活ですから。(ん？)食べ物も、お肉とか魚とか食べないですよ。(ああ、そうですか)着るものも、おしゃれはしないですね。男でも女でもしないですね。
(I11-8)(なにか、頭を切る人が居るそうですが)その場合は、親が亡くなった場合は、息子たちが頭の、頭切るんじゃなくて髪を切るんですね。坊主になるの。(それは1回やるだけですか)1回だけ。
(I11-9)(そのあとは、1ヶ月間はのばす？)それで、普通の生活に戻るんですよ。その1ヶ月後の、集まって、お祈りとかいろいろあって、お坊さんたち来て、そっちもいろいろご飯食べさせて、それで普通の生活に戻るんですよ。
(I11-10)(お坊さんが来たときには、何か祈るんですか)お祈りはしますね、やっぱり、その方が亡くなったといって、息子が居たら、坊主になって、すわってからですね、僧が言う通りに、言葉を、なんとか、日本でもあるじゃないですか。お坊さんが言うときに、一緒に言わなければいけない。(ああ)ことばが、しゃべりながら、やはり亡くなった親の、何というかな、尊敬して、お祈りして、実際、子どもと言うことで、せぐめんとしね<ききとれず>(ん？)子どもだから、親を尊敬しなければならないから。そういうことについてはお祈りするんですよ。
(I11-11)(お墓みたいのを作るわけですね)そうですね。(庭に？)庭に。(そこにはお花を供えたりしますか)花はですね、実際ね、神様のちいこい、木があるんですけど、(ん？神様のなに？)そういうお祈りする木があるんですよ。(お祈りする木がある)ちょっと日本では無いですよ。 ちょっと分からないですよ。(庭に木)ちっちゃいだけど、それをそこに、墓の上に置いて、毎晩、やはり毎日夕方、お祈りするんですよ。家族の人たち。貝の、こんな白い、

大きいのがあるんですけど。(大きい貝) 吹いて、そして、お祈りするんですよ。(ホラ貝ですか) そうですね。(プーッと、ああそうですか)
(I11-12) (そのときに、お水とか食べ物は供えますか) 食べ物は出さない。インドでは、人が亡くなったら食べ物は出さない。日本では出しますけど、インドでは出さないですね。お祈りの時だけ、果物とか、ちょっと、米とか、そういうの出しても、米はおばさん<お坊さん>はもって帰るんですけど、果物はみんなで、お祈り終わったら、神様の、何というかな、まあお祈り終わったから、みなちょこっと食べたりします。
(I11-13) (それで、あの、家の中には何かお祈りする場所がありますか、死んだ人の) 死んだ人の一般的にはないですね。(死んだ人のはない) ないです (神様) だから神様のは、もちろん家の中でもあるけど。だから家の庭に、お墓作る人の墓には、お祈りだけですよ。家の中には特別ないですね。家の中にも、もちろん写真とか、こういう風に貼ってあるかな。
亡くなった人の。(ああ、亡くなった人の。んー)
(I11-14) (次に、死んだ人の魂が戻ってくるというようなときはありますか) それは、インドの場合は、きれいに、なくなったときに、ありたいこと、やりたいことがですね、亡くなった人が死ぬとね、なになにかしないといけないとか、あるじゃないですか。決まりがあるじゃないですか。それをきれいにしなかったら、ちょっと怖い感じがあるんですね。その人が、まだ、夜になって、ちょっと皆にいろいろ怖がらせたりとか、人の体についてきたり、そういうのあるですね。
(I11-15)そのときは、インドのブッダガヤがあるんですよ。ブッダガヤに行って、まだ大きなお祈りしないといけないですよ。そこで祈りしたら、そのときはそっちが落ち着いて、もうきれるんですよ。(ブッダガヤの大きいヒンズー寺院ですか) そうそう。(私去年) カルカッタから上なんですけど。(行きました私) いきました？そこに、お祈りしないといけないんですよ。実際それで、その人は落ち着いて、まあ、きれるんですよ。(ああ、そうなんですか)
(I11-16) (日本だと、年1回、1回とか2回、お盆とかですね、魂が戻ってくるというんですが) ないですね。(戻ることはないですか) ないですね。
(I11-17) (何かですね、何人かにインタビューしたんですけども) だから場所によってちょっと違う。(9月のはじめにもどると) だから、自分は聞いたこと無いですよ。(聞いたこと無い) ちょっとお坊さんみたいな感じの人たちが、年に一度、お祈りするんですけど。ちょっと特別に。普通のよりちょっと大きめにお祈りしますけど。でも、戻ってくると聞いたこと無い。日本に来て、ああこういうこともあるかなと思った時があります。
(I11-18) (ああそうですか) はい。これ、9月の人はどこの人？ (たしか、デリーの方の人だと。ナブラトレというんです) (なんか、九日の夜という意味らしいです。聞いたこと無いですか) ナブラトリはね、ナブラトレは祭りがあるんですよ。こういう事があるというのは、ちょっと分からないんですけど。祭りはあると思うんですよ。自分はあまり。広いから、いろんな生活の人いるから。ナブラトレといっても、どの地方のとか分からないと、私も答えられないですね。自分は、カルカッタ、ベンガル地方だから、そこのあり方は分かるんですけど。見てきただから。
(I11-19) (特に、毎年何かやると言うことはないと) ないですね。だから、お坊さんたちはある。毎年。(お坊さんはやる) やります。お坊さんたちの、カスト教のランクがある。カストのランクがあるじゃないですか。ヒンズー教とかいろいろ、宗教の順で。お坊さんたちの誰か、亡くなった場合は、年に1度、特別なお祈りがある。毎日しても。年に一回は特別にするんですよ。一般の人はしない。
(I11-20) (そうですか。それでは、輪廻すると思いますか。人間の魂が。輪廻。reincarnation) りんね。例えば？どういう意味？ (人間が亡くなったあとにまた人間になる) ある。それは可能性ある。(人以外になることはありますか) ん？ (人間以外になることはありますか) 人間以外になること、あると思う。
(I11-21)だから、分からないけど、人が地獄、天国の、そういうところでしょ。で、それは、何というかな、いい事したら、天国にいける。悪い事したら地獄。地獄行く人は、人間に生まれ変われないとか。たいへんな目にあったり、虫になったり。いろいろ生まれ変わってから、いくつかになってから人間に戻る可能性があるとと聞くんですが。それは本当かどうか、ちょっと自分でも、(笑い) いえないですね。
(I11-22)地獄、天国の意味は、今ですよ。生きている間。(ふーん) いい事したら、みんなついてくる。いろんなことしてくれる。悪い事したら誰もついてこない。悪いこと言う。それが地獄。自分の考えです。
(I11-23) (はい。・・えー、そうですね、イメージの中で、死んでから何日ぐらいでで生まれ変わるとかいうのはあるんですか) 早くても、そうですね、結構あるね。例えば、何というか、早くても1年後かな。あるときもっと早いとかいうけど。大体1年ぐらいかな、亡くなって生まれ。

(I11-24)（それで、天に行く人もあるわけですよね。イメージの中で。それは、大体たくさんの人が天に行くとみんな思って居るんですか、それとも少しの人ですか）そうですね、だからさっき話した通りなんですけど、地獄天国の意味で、天に行く人と地に行く人があるから、やっぱりたくさんのでなくて、人によるじゃないかな。（人による？たくさんではない？）うーん、だからいい人だったらそうじゃないかなと思います。実際見たこと無いから。
(I11-25)（それで、天に行ってもまた人に戻ることはあると思いますか）天国行っても人に生まれ変わる可能性は、あるんですね。
（それから、○さんは、また人間になりたいと思いますか）それはですね、どっちにせよ考えてないから、悪くはないですね。（悪くはない）はい。
(I11-26)（それから、死んだ人に対して、なにか報告することはありますか、生きている人が）生きている人が？死んだ人に？（死んだ人に、こう、今私はこういう事していますよとか）考えないないですね。持ってもないね。報告したいとか。別にそういうの全然考えてありません。
(I11-27)（じゃあ、インドにいる頃に、祖父さんとか、お祖母さんは、死んだ人に何かしゃべっているということはなかったですか）そうですね、そういうのあるけど。だから（ある）でんくまーる<ききとれず>といったんですけど、人間ちゃんとしてしなかったら、人間、体についてきたりとか、でその人の口から話すんですよ。亡くなった人が。口から
(I11-28)（その人の口から？）ええ。体に入ったからですね、口から全部しゃべるんですよ。ここでこういうことがあって、こうなって、ああなあって。全部しゃべって、それから、そういう専門がおるけど、そういう専門が聞いて、全部聞いてもらって、それから、やっぱり体から出るんですよ。
(I11-29)（専門の人とはなんと言うんですか）向こうで？なんと・・一般的にロージャというんですよ。例えばマジックする人みたいなもんですよ。
（ロージャって、アルファベットでどう書きますか）ROJAA。（これはどういう意味があるんですか）その、そういう専門家に、例えばですけど、幽霊が憑いてきたときに、普通じゃないから、ちょっとおかしくなってくるんですよ。そうすると、家の人分かっているから、その人に、ロージャさんに、頼む。呼ぶ。それで夕方来て、いろいろ、そしてしゃべってから、その人を体から抜け出すんですよ。
(I11-30)（この人はバラモンですか、お坊さんですか）お坊さんじゃない。一般の人間で、ただその力を持っているんですよ。その言葉言うとか、そのあり方言うとか、知っているだから、その人じゃないと、できないですよ。田舎で、そういうひとが居って、夕方太陽が沈む頃に来るんですよ。そして、それからこういうふうにあるんですよ。でそれから、体から離れて、次の、どこかいけなかったそのことを、ちゃんとして、お祈りして、それから落ち着くんですよ。もう二度と、こない。
(I11-31)（その一、離れたと。そのあと天にいったとか、別の人間になったとか分かるんですか、その人）それは、ちょっと分からないですね。そういう場合。ただ、ブッダガヤに、おおきなおいのりしたら、そこにどこかいるっていうんですよ（ん？ブッダガヤに行ってお祈りすると？）そこに何かそういう場所があるらしいんですよ、でそこにみんな集まるみたいな感じがあるんですよ。（そこに集まる？）ブッダガヤに。お寺か何かあるらしいんです。（魂が集まるということですか？）はい。
(I11-32)（そうですか。・・はい。ええと、じゃあ、○さんの地方では、川に骨を流すことはあまり）骨は流さないです。カルカッタにガンジス川あるけど、だから、（おへそ）おへそだけ、もっていってガンジス川に流すんですよ。あとは、灰とかは流さないですね
(I11-33)（日本では骨を大切にするんですが）大切にインドではしない。死んだら火葬するけど、何にも家には置かないですよ。（お墓には何を入れるんですか）その灰、とか骨の（ああ一部）ちょこっといれて。（そのお墓はいろんな人のが入って居るんですか、ひとり分？）ひとり分。ま、みんな出来ないから。金持ちしかできないから。金かかるから。できない人は、そのままそういう火葬場で、そのまま灰、そこで残ちゃうですけど。ただ、その人の名で家にちょっと、お祈りしたりするんですけど。金持ちだったら、たぶん自分の庭にちゃんと墓を<つくる>。（ああ、そうですか。もっとみなさん、川に流すんだと思っていました）
(I11-34)例えば、町の人が、町の所流れているから。そこで火葬にするの当たり前というところある。田舎の人が、そこまで灰持っていくの難しいですよ。川のところに住んでいるわけでないから、いろいろなところに居るから。川まで行くの大変ですよ。ガンジス川まで。流すならガンジス川だけですよ。あとどこも、流せられない。（そうですか）
(I11-35)（えっと、ガンジス川をちらっとみただけなんですが、灯籠というんですか、葉っぱみたいなのに、ろうそ

くみたいに火をつけて川を流れているんですが）死んだ人へのお祈りでなにか流しているんですよ。その名前で流すんですよ。
(I11-36)（お墓に対して毎日お祈りしますね、そのときは、何をお祈りするんですか）例えば亡くなったその人の名前をいって。最後の世話がちゃんとできなかったとか、許してとか。自分の家族を守ってとかそういう風に言う人いるんですけどね。言わない人で、ただ何も言わないで、ただ普通の、御願いしますということね。
(I11-37)（それで、死んだ人へのお祈りと、神様へのお祈りっていうのは別）別。（神様へのお祈りはへやの中でやるんですか）部屋の中でもあるし、外でもあるし、そういう場所が。さっきいったように、場所があると、金持ちは、寺も別に造っているんですよ。家の中でも、家の外でも、お寺が造ってある。そこでお祈りしたり。
((I11-38)ヒンズー寺院は、いろんな神様がいますよね。カーリー神とか、シヴァ神とか）シヴァとか、シャンカルとか、ガネーシャ、あとドルーガ。あとラーマ。いろいろあるんですけどね。（何か特にお祈りする方っているんですか）僕ですか。僕は、カーリーにお祈りが多いです。エスタにあるんです。（ん？）エスタに写真があるんですけど。（どこに）エスタ、レジの所。（あ、そうですか。）で、カルカッタがカーリーですから。（ん？）インドのカルカッタは、カーリーが一番人気です。
(I11-39)（そうですねえ。いろんな派がありますね。ヒンドゥー教の。自分はカーリー神の派だった場合、その人が、他のお寺に行ってもいいんですか。例えばシヴァ神のお寺とか）別に、気持ちが分かれば、どこ行ってもいいよ。神様、ある、分かるけど、めちゃめちゃ信じても居ませんから、どこでもいっちゃう。じゃーちでも行くし、（ん？）
(I11-40)イスラムの所いくし。キリシタンのお寺でも行くし、どこでも行けるんですよ。（えっと）イスラム教のお寺とか。（そうですか）キリシタンのお寺とか。（あ、そうですか）でも、お祈りするときは、やっぱり自分の、ヒンズー教のところにお祈りする。行くときは行っちゃうの。別にいんど<ききとれず>はしない。
（I11-41）（じゃあ、例えば、イスラム教の寺に入れるんですか）入れるよ。ただ、入れないところは、マッカマディナという場所、（？）マッカマディナじゃない。何だったかな。ちょっとあらこんてが<ききとれず>あるんですけど、そのお寺だけ一般の人入らない。ヒンズー教なら入らない。入る前は、牛<ギュウ>を食べないといけないと聞いたことある。そこのお寺に行ったら、牛、先に食べさせるって。
(I11-42)（ええと、カルカッタにはイスラム寺院がたくさんありますよね）そういう寺に、行っても別にいい。（おかしくない？）はい。（入れるんですね）入れる。（モスクの中に座れるんですか）ちょっとなにか、一緒に、だれかいっしょに行ってるから、一緒に中に入って、座ってもいいし、座らなくても、その人の気持ち。すぐ出たり。
(I11-43)（そうですか。例えば隣が神社ですよね。）行ったことあるよ。（天神様にはお祈り）いくよ。（行くんですか）あま、パンパンとして。<パンパンとたたく>（ああそうですか。キリスト教の教会に行って、また。日本的な感じですね）僕が変わったところあるけど。
(I11-44)（日本に来て変わりましたか）いや、インドにいる時から。だから、さっき天国と地獄の話した。自分の考えはこうですよと。生きてる間が天国地獄。死んだら誰も見ていないから。だからそういうことですよ。
(I11-45)（神様がたくさんいますが、その元は、一つの神様ですか、それともたくさんの神様ですか）そーね。神様は一人しかいない。エスタしかいないね。この神様、いろいろシヴァとかいろいろあるけど、普通の人間ですよ。ただ、やったことが一般の人と特別やったことあって、神様と同じようにそういう認めがあった。この人が神様、すごいですと。それが。何か特別。
(I11-46)名前ちょっと分からないけど（中村です）中村さんも、すごいことあったら、すばらしいことあったらね、もう明日、神様と同じレベルで認めがなるんですよ。だから、こっち<天神>は、本当は神様と思っていないですよ。神様は実際、太陽とか、空気とかが、神様。こういうものがないと世界がない。人間的に素晴らしいことあって、こういう事がなって、そうじゃないと。インドは困っている。インドはたくさん神がある。困ってるの。もし神様がたくさんあれば何で助けてくれないの。インドは食べ物で困っている。雨で困っている。雨が降らなくて困っている。
(I11-47)（としますと、心の中で本当に助けて欲しいときに話しかけるのはどの神ですか）どの神様に言うんですかと言うこと？自分は、カーリーにいうんです。マハカーリー。マハはおかあさんの意味。カーリーは神様の名前。マハカリーというんです（じゃあ、そのマハカーリーが本当の神だと思われか。・・神の現れ？）ないけど、何か特別力があるから。
(I11-48)（本当の神とは太陽とか空気？）水とか。そういうふうに目に見えないものが神様ですね。水がなくても空気が無くても、皆息が出来ないとなるじゃないですか。 人間がなくなってしまう。
(I11-49)（あと、いろんな木とかですね、山とかにすべて魂がやどっていると考える人も居るんですが）あると思う

がね、一般的には自分がそこまで考えていないからどこいってるだろう。亡くなったら、亡くなっているとだけ考えているから。あまり木に居るとか、お寺に居るとか、空に居るとか、まったく信じても居ないし、あんまり考えてもいないですね。人が生まれたから、亡くなったということ。
(I11-50)（どれが一番近いですか、輪廻して他の生き物になるのかと、死んだら消えてしまうのか）うーん、そうですね、それも考えたんだけど。両方ともあると思います。生まれてくるときもあるし、切れてしまうところもある。(切れてしまう）生まれてくることもある。(ありがとうございます）何かあったらいつでも。＜ラッシーをくれる＞

インタビュー2　ジャカルタ　イスラム教　女性　20代　前半インドネシア語後半日本語、英語
２００２年７月２３日　(2章の事例20)

W20- 1（1　あなたの家族で、この10年の間に亡くなった人はいますかのアンケート項目）ない、と書いたが、お祖父さんが。母の父。２年前になくなった。一緒に住んではいなかった。
W20-2　（2　人は死後どうなると思いますか）終末までお墓にいる。死者は、終末が来るまでお墓の中にいる。でも、霊魂は違うところで、肉体はそこで。＜インドネシア語で話している＞書いているのと違うけど、口では、遺体は墓の中にいるが、霊は別のところに、どこかというと、今の現実のところではない。回教でアランバルザーといっている。(それは少し高いところですか、低いところですか）難しい(イメージでいいです)少し高いところ。あまり知らない。
W20-3（3　死者が来世で救われるように、どのような儀式を行いますか。文化によって違うところがあれば教えて下さい）　儀式はある。大体は、人が死んでから一緒に、ご家族とお祈りをする。
（あなたはジャワ島ですか）はい。
W20-3-2（ジャワ文化では７日、４９日、１００日に集まることを、やるそうですが、やりますか）やります。(そうですか。それは大体ほとんどの人がやりますか。半分の人ですか)大体全部。(インドネシア語で)
＜訳　絶対やっている。なんでかというと本当はそれは、ヒンドゥー教の影響ではないですか。それを回教の人が使っている。回教ではそういう教えはないですけどね＞
W20-4　（死んだ人の写真に花を添えたり、食べ物を備える文化があります。あなたや親戚の考えを教えて下さい）その文化はありません。イスラム教の場合これはやりません。(昔はありましたか)昔は、
(インドネシア語、花、食べ物、果物)＜訳　今、訂正している。花は撒いていているみたいですけど。でも、お供えは、写真の前などではやらないと＞
W20- 4-2(お花を撒くというのは、植えるのか、花瓶にさすのか)撒く。(花瓶に挿すのではない？こうするんですか)花瓶に挿すこともある。でも大体撒きます。(何の花を）いろいろ。(インドネシア語)マラティって知っていますか。(通訳氏、においがいいんです)ジャスミン。(マラティというのはジャスミン？)そうです。
W20-4-3（さっき、魂がどこにいるかと関係するんですが、４番ですね。魂がお墓にいると考える人もいるんですが、います？）そうですね、信じている人もいるし、信じていない人もいる。(あなたは、どこか上のほうにいて、お祈りすると、こちらに気づくと思いますか)＜訳＞はい。多分そうだろう。霊は気づくだろう。
(その霊に話しかけることはできます？)できませんけど。実はできませんけど。違うように、決まっている。死んだ人と生きている人と世は違っているから、話すことはできません。
W20-4-4（人によっては、はなせると思っている人はいる？例えば、日本人は結構話せると思っているんですよ。この大学に受かりましたよと。おじいさんにいうことがあるんですが、そういう人はいますか）います。(通訳氏　お墓に行ってでしょ）　(大体何％の人がそういうことをすると思いますか。１０％？２０％ぐらい？）３０％ぐらい。
(通訳氏　先生、日本人の場合はお墓にいくんですか、それとも写真のまえで）(両方ですね。）(通訳氏　インドネシア人の場合は、写真の習慣がないんですよ。お墓よね。）
　墓。＜通訳氏　写真の習慣がないんですよ先生＞
（それから、別の国なんですが、お墓でノックする人がいるらしいんですが、そういうことする人はいますか）えー。
＜通訳氏、ないんじゃないですか＞　でも、挨拶することはあるかもしれない。
＜通訳氏　例えばどうやって？＞＜インドネシア語　訳＞　あいさつするときもある。お願いしたいとき。
(お願いしたいとき、お墓にいってお墓に挨拶する？)・・
（それで、死んだ人に話しかける人が３０％ぐらいいて、報告だけでなく、お願いもするわけ？大学に受かりました

とかだけでなく）
そうですね、普通はお願いしたいとき。
（インドネシア語で）
＜通訳氏　中村先生は、自分の祖先の墓にという意味でしょ。＞（インドネシア語）
＜通訳氏　やっぱり両方だそうです。さっき勘違いしたらしいですね。自分の祖先のお墓にいくと思っていないんで、一般のまあ、いわゆる霊のありそうなお墓とかね。（なるほど）そう思っていたよう。勘違いしたよう。＞
（両方といったのは）お願いと、報告もしていると、自分の祖先のお墓に。
（さっきは祖先でない墓だったんですか。スマイルの墓とか）＜通訳氏　そうですねえ。＞
（インドネシア語にて）＜通訳氏　ご家族のお墓の話だよね＞　失礼しました。
W20-5（笑い　５　死んだ人の魂が、この世の中のわれわれと交流できるという考えが、日本にはあるんですよ。さっきの話しかけるのもそうですけど、魂が上のほうからですね、夏のお盆のときに、３日間来て、それをわれわれが招くんですね。３日間いくと、８月１５日にまた天に帰っていくんです。こういう習慣はないですね。）はい。（そういう空想は、理解できます？）
（インドネシア語）　理解できません（笑い）
＜通訳氏　理解しますけども。そういう考えはないですね。＞インドネシアでは。
（これから私バリ島でもインタビューするんですが、バリ島にあると聴いたが、知っていますか。魂が帰ってくると。）
＜通訳氏　祖先の魂ですよね。＞（インドネシア語）　聴いたことがあるんですが、あんまり、信じない。（信じないのはわかるんですが、イメージ、空想として、魂がお盆に３日間だけ来て、また帰るという空想は、われわれがタイムマシンで１００年昔に戻れるという空想と比べて、同じぐらい、ですか）（インドネシア語）　笑い
＜通訳氏　過去にも戻れるよね。未来にもいけるんでしょ。タイムマシンは。訳＞　想像できますけどと。
（じゃあ、まあタイムマシンと同じくらい想像しようと思えばできるけど、実際にはないということですね）はい。私の場合は、これは、イスラム教と違いますから。
（そういう想像は、しないほうがいいからしないんですね。しないほうがいい）（インドネシア語）
＜訳　でも映画は見ているようですよ。＞（笑い）
W20-6（６　死後に、別の人間として生まれ変わると考える文化がありますが、どう思いますか。）
訳　死者は、また別の人間の体にまた生きるというのは、私は信じません。　これは仏教の考え方ですか。
W20-6-2（ヒンドゥーでしょうね）日本の仏教の考え方はどうですか。（日本の仏教は、インドの考えが入っているので、また再生するといいますが、ブッダ自身はそう考えていない）化身とは。（化身もヒンドゥー教の影響です。）じゃあ、日本の仏教でいいませんか？（いえ、言いますよ。やはりインド文化と仏教は混ざって入っています）
W20-6-3（それで、やはり別の人間として生まれ変わるということは、想像できますか）
できます。（うん、それは、楽しいことですか、つらいことですか）つらいと思いますよ。（そう）というのは、まえは人間になって、でも死んだあとで、何になるのかわからないだから。
＜通訳氏　もっと低い地位に再生するときはつらいでしょうといっているわけですよね。＞
（例えばどんなものになるのはつらいと思いますか）そう、例えば、動物になるとか。
W20-７　（この数十年の近代化で、あなたの周りで死生観に変化がみられますか）　ない
W20-８　（あなたは神はただ一人だと考えますか）　そうです。説明の訳　回教の教えの中では、宇宙とその中を創造するのは、ただ一人の神だからです。
ｂ　（ある宗教に属している人が、その他の超自然的なもの（例えば、カウイ山のような聖なる場所に幸運を祈りに行く）を信じることがありますが、どう思いますか）訳　私はそういう考えに対して賛成しない。なぜかというと、回教の場合は、人間を創造する人は一人しかいないから、別のものに拝むというのはよくない。回教の場合、それはムスリック、裏切り者という意味でしょうね。（インドネシア語）アラーを裏切っているという考えです。
（インドネシア語）今の説明を正しいかどうか確かめている。正しいかどうか。
W20-ｃ　（日本社会では、赤ん坊を神社に連れて行き、結婚式を教会であげ、お葬式をお寺で行うというような混合の伝統があります。この現象についてあなたの考えを書いて下さい）
面白い文化です。
W20-9（先ほど化身といいましたよね。アッラーの神が何か他のものに化身することがありますか）神様？（例えば、何でしょう、例えば、インドでは、クリシュナがブッダに化身したとかいいますよね。アッラーがブッダに化身する

とかいう考えはあるんですか）ありません。そういう考えは。
W17（聖なるものがありますよね。・・・
＜通訳氏　先生、回教とかキリスト教にはですね、エンジェルというのがあるんです。いわゆる天人というのかね。別に女じゃないんですよね。いろいろな。たぶん、ヒンドゥー教の場合いろいろ神があるわけですよね。回教の場合、キリスト教の場合、神があるけれど、その下にマライカというんですが、エンジェルだよな。女ですか、男ですか。別に男女ではなくて、自分の使いを送るというのもあるんですよね＞
（ああ、使いを送る）神自体ではなくて。（インドネシア語）
W20-10（じゃあ、例えばどんなものがありますか。マライカには）ティア　うーん、天使は見えないけど、天使は実はなんでもなんでも形をする。〈インドネシア語〉訳：いわゆる神の使い、天使というのは神の使いが、人間の形のように人間に何か告げるという考えはあるけど。たとえばこうやらないでください、こうしなさいとか。人間を救うために現れる場合もあると。
W20-11（それは、イメージの中にということですか、それとも聖人になって）イメージじゃなくて、でも、本当は。本当に。
（人の形になって伝えることがある）訳：たとえば回教の人がメッカに行って、そのときに人間の形として神の使いがきて、いろいろやったり、その人の信仰を確かめることがある。
W20-12（先ほどの終末論がありますね）（キヤマ）（世界の終末というのは、すごく近いと考えますか、それともずっと先だと思いますか）ちかいと思います。（大体のイメージでいいんですけど、いつごろだと思います？）ええ、普通の人間はわからないんですけど、本当は一番知っているのは、神様だけ。アッラーだけ。
（普段生きている時に、そういうことはよく考えますか）私の場合は、よく。もし近づいたらどうするとか、よく考えます。
W20-13（・・はいはい。・・さっきの輪廻ですけど、動物になったりするのはつらいですよね。でも、別の考えもあると思うんですね。すごく偉い聖人が死んでもまた聖人になって、何回も何回も人々のために尽くすというような話が日本ではあるんですけれども、・・）
通訳氏　今、水持ってこようかなと。
W20-14（聖なる人、ビシュヌが何度も違う人になって表れ、チベットのダライラマも死んだらまた現れてダライラマになる。そういう風に、すごくいい人が何度も生まれ変わるという考えはわかります？）わかりますけど、でも、イスラム教ではそういうことは、ないかもしれない。
W20-15 これは、生まれ変わる、といいますか。（うん、うん、それはイスラム教では、ないといわれるんですね）（それで、いろいろな宗教が混ざりますよね。ヒンズー教とイスラム教が。そのひとたちが、ケペルチャヤン、クバティアンというんですか）クバティアン。（という人は、混ざっているんですか）クバティアンは、キリスト教だけあるんでないですか。一緒にお祈りする。（ヒンドゥー教とイスラム教を混ぜている人のことをなんと言いますか）一緒にお祈りするの意味ですか。（そうではなくて、イスラム教なんだけど、ヒンドゥー教の神にも祈る人のこと）これは、いないかもしれない。
W20-16（これ、５番）これ、習慣ですね。（文化でしょ、ジャワ文化）そうです。文化だけ。でも宗教のことは。（５番のケペルカヤンは違いますか）ケッペルチャヤン？これはちがいます。これは宗教でなくて、文化みたい。（ほー、そう）（でも、そういう人は、ヒンドゥー教に近いことをやっているんでしょ。）そうです。
W20-17（・・ええと、・・そういう風に、違う宗教なのに、いいところをやるということが、いろんなところであるんですけど。例えば、他の宗教の人がイスラム教の聖人のお墓を訪問してお祈りすることはどう思いますか）（中略）
W20-18（今の日本語わかりました？イスラム聖人にお祈りに来ますよね。）これはインドネシアで？（インドネシアとか、パキスタンとかいろいろなところで）
（インドネシア語）＜通訳氏　知っていますかということでしょ＞知っています。
W20-19（あなたは、そういう聖人のお墓に行きたいと思いますか）行きたいと思います。でも、メッカにあるムハンマド、知っていますか（ええ）これ、私もいきたい。お祈りしたい。（ムハンマドのお墓？）イスラム教で一番偉い人。（お墓があるんですか）はい。（そうですか）
W20-20（それで、インドではヒンドゥー教の人が、イスラム教の聖人のお墓に来て、お祈りするそうですけど、そういうことをどう思いますか）お墓の前に、祈りすること？〈インドネシア語〉訳　本当はいけないことです。回教の場合は。＜通訳氏＞　彼女の考えだと、何か、欲しいこと、ものがあったりすれば、神にお祈りして、なんというの、

乞うべきですけども、そういう聖人のところでお祈りして何かほしいというのは、本当はいけないことですけれど、実際には行われています。ま、願いがかなうようにと、行ったりする人もいるけど、それはいけないこと。
W20-21（じゃ、ヒンドゥー教徒が来るのは、あまりよくないと思いますか。）（インドネシア語）訳　どこに来るんですか（イスラム教の聖人のお墓に）（笑い）別な宗教だったら、大丈夫だと思う。（ああ、イスラム教の聖人のところでヒンドゥー教のひとがお祈りしていても、それはかまわない？）　これは、影響ないから。　＜通訳氏＞　何の影響？
（インドネシア語）＜通訳氏　今ね、何言っているかよくわからないけど。訳＞　あの、そのヒンドゥー教の人が、回教の聖人のところに、墓にお祈りするのは、別に、私、回教徒として、かまわないと。自分には関係ないことで。その人は、何か得るかどうかは関係ない。つまり、かまわないわけです。（笑い）
（すいません、難しい質問ばかりで）
＜通訳氏　でも、来ないんじゃないんですか。＞
W20-22（インドの一部にシンクレティズムといって、二つの宗教が混ざる現象があって、シンクレティズムがあちこちで起こっていると僕は思っているんですよね。）＜通訳氏　でも、インドネシアではちょっとあまりないような気がするね。＞じゃないですか。
＜通訳氏　インドネシアもバリの人はヒンドゥー教ですよね。仏教の人もかなりいますけど。＞（ちゃんと分けて）そう。
W20-23（それで、・死んだら神様の近くに行くと考えるんですね。魂が神様と一体になると考える人がいるんですけど、わかりますか）通訳氏　仏教の考え方ですね。（ヒンドゥーですね。神と一緒になる、混ざる、神とくっつく）　とはいえないけど、神と死者の魂に会う考え方があります。（一緒になるという考え方ね）　＜通訳氏　一緒になる合体という意味じゃないよ、先生。会う（ミートだけ）混ざっているじゃなくて。＞

＜ここから、逆質問（中略）＞

W20-24 イスラム教では、天国に魂が行ったら、現実の世の中に来るって言うことはないんでしょ。）そうです。
（中略）
W20-25（インドネシアでも、ジャワ文化に巫女さんがいるんでしょ）シャーマンみたい（ジャワ文化にありますか）あります。（どのへんに）村にある。（まだたくさんありますか）たくさんあるかも知れない。
（そういうのは、イスラム教とちがうでしょ。対立しませんか。喧嘩、これでいいんだとか、だめだとか）ありますね。
W20-26（日本人は、山にも山の神がいるし、たくさん神様がいる多神教。海の神様も。ですから、山に登ったら山の神に祈り、海では海の神に祈ります。でも、まいにち祈っているわけではない。たまに祈る。）これは神道ですか。（神道ですね。神道がやっぱり、一番昔からあるから、必ず出てくる。神がたくさんいる、精霊がたくさんある、インドネシアで言うと、ロウスチというんですか）神道と仏教は、どっちがつよいですか。
（心深く、無意識の世界では神道が強い。けれども組織としては、仏教が強い。江戸時代は、全員仏教になっていました。仏教が人々を管理していた、行政機関みたいに）
W20-27（マライカですけどね、モハメッドさんはマライカですか）ちがいます。（例えば、どういうものがありますか）人間に見えない。存在するのは、私たちは信じています。（もうちょっと教えて、どういうもの）天使というのは、神様のお手伝いさんみたい。もし人がよくないことしたいなら、天使は、これしないでくださいといって、guardian　保護者、後見
W20-28（すごくすばらしく、力のあるものを、どうして神の天使だと思う場合と、いけないものと思う場合がある、どうして分かれるんですか）（例えば、止めなさいといってくれるひとは天使でしょ、すばらしい自然、山、それも神が創った山。その山に対して、祈るというきおとはだめなんですね。どこが違う）（山の神を神が使わしたものと思っちゃいけないんですか。そういう考えはないんですか。）山をお祈りするのはだめというのは、山は、もの。作るものだから。（神が創ったものね）一番偉いのは神様でしょ。だから。
W20-29（そうね、神様が全部創ったわけですね。そうそう。日本人は神が全部創ったとあまり思っていないのね。自然に偶然できたと思っている。宇宙も偶然できた。だから、人間も、偶然できたと思っているから、魂は自分のものだと思っているみたいです。これはジ○先生とも話したんだけど。だから日本人は自殺が多いですね。）そうです。（自

殺が多いのは、自分で魂を無にできると、考えるからであって。魂が神様のものだとはあまり思っていない。イスラム教徒は、神様のものと思っていますか、魂が。）そうです。
W20-30（じゃあ、たくさん神様に、まかせて生きる、いきている？）神様は、全部、人間の生活全部神様が作るみたい。だから自殺はできない。
W20-31（例えば、大学に受かるために一生懸命勉強しますよね。で、受かったあと、ありがとうございますと神様にいいますよね。そのときに、受かることはまえから決まっていたと思いますか、自分が努力したから受かったと思いますか。）そうですね。まえは、神様に決まっているだけど、でも私たちの努力によってこれを合格するかどうか。（決まっていたけど、努力していなければだめになるわけね）
W20-32（そうそう、日本人は学問の神様が別にあるんですよ。太宰府天満宮。多神教ですかね。）これは、前は決まっていることは。合格したから、神様にお祈りするでしょ。そうしたら、これ変えることできますか。決まったこと。（日本人は、変えられると思っていると思う。勉強しないのに、神様にお祈りして、受かることもある。でも、本当には信じていない。本当は努力で受かると思っている。でも、これもやってみる、あれもやってみると、いいことだからやってみると。学問の神様にもお祈りする。でも本当には自分の努力だと思っていますね。）
W20-33（いいですか、イスラム教は土葬だけど、バリ島では火葬ですね。ということは、昔はジャワ文化も、火葬だったんですか。）
あるかもしれない。私、特別な本を読んだことがないですけど。
W20-34（火葬はイスラム教ではしないのは、最後の審判のときに、肉体がよみがえると思うからですか。肉体が甦りますか。キヤマットのときに、お墓に入っていた人が、魂が戻って、生き返りますか。）そうですねえ、肉体は、キヤマってうのが、期間とかわからないんですけど、でも肉体は、だいたいくずれる。くずれて、（腐ってますよね）くさっちゃっただから。
W20-35（じゃあ、この体は生き返るから、燃やしてはいけないというのではない？）でも、本当は燃やしてはいけないのでは。（なんで）そのまま、ろうの（ろう）お墓、ろうの中にいて。（燃やしてはいけないのは、そう決められているからだと思うんだけど、もともとの意味は、どうしてだと思いますか。復活するためだと僕は想像したんだけど）
（日本人だったら、もやして骨にしますよね。燃やすことで魂が出やすくなるというか、天上にゆくっていうか。）
ていうか、それ、知らない。
W20-36（キリスト教の中には、やはり火葬にしている人がいるんですが、イスラム教では絶対しないですね。）キリスト教は土葬でないんですか。（火葬もありますね）中国系は、大体火葬。（仏教ですね）（火葬しているのを見て、どう思いますか）苦しいんじゃないかなと。（苦しい。はい）
W20-37（神様を信じない人が結構いるんですよ。神はいない。あえて言えば、神は心の中にいると。そういう考えはどう思いますか。）そうですね、イスラム教の場合は、これはだめですね。神様は私たちを創造しましたから、人間に対して、神様を尊敬しなければならない。（うん）
W20-38（じゃあ、神はいるとして、よく自分の心の中で考えることで、神と出会えるという考えがありますよね。深く考えて出会う。どう思いますか。）神様を信じているだけは、イスラム教の中で足りないんです。イスラム教人になりたいなら、するだけじゃなくて、毎日５回くらいお祈りしなければならないというのは大切。
W20-39（５回のお祈りのときに、こういう風にアラビア語をしゃべりながらお辞儀しますよね。そのときに、自分の人生について、神に相談したり、示唆、何か教えてもらうことはありますか。お祈りのときに人生について対話しますか。）自分の人生について何かお願いしたいときは、お祈りします。（お願いではなくて、メッセージをくださいと）何か迷うことがあったら。（それは、５回のお祈りのときするんですか、別のときに一人でお祈りするんですか）そうですね、大体、５回のお祈りのときします。（じゃあ、こうやりながら、話しかけていたりするわけですか）あるいは、お祈りをしたあとで。
W20-40（それで、神様は怖いですか、優しいですか）やさしいだと思う。怖いというのは、もし何か自分が悪いことがあったら、神様が自分になにか。
W20-41（それで、最後の審判、キヤマットで天国と地獄に分けますよね。大体、何対何で分けるとかんがえていますか）（笑い）そうですね、あんまりわからない。私が考えているのは、地獄ですんでいる人は多いんじゃないかなと。でも、地獄ですんでいる人は、天国にいけるかもしれない。でも時間はどれくらい長いかどうか、わからない。（天国に行った人が、また地獄に行くことは）いない。
（地獄から天国だけはあるのね）はい。（地獄からまた人間になることはない）ないです。

W20-42（この霊魂は、人間を助けることはできない、神様だけができると）
（例えば霊魂がもし、あったとして、その霊魂が、アドバイスをするとするね、私に。もうちょっと、あなたは、日本に留学しなさい見たいに、感じると。でも、その霊魂は、私を助けているのではない、神様が助けていると。こういう霊魂のことは悪魔というんですか。悪魔と思いますか）悪魔の意味は悪い、（イビルスピリット、サタン）思わないです。サタンというのは、わるい霊魂。人間になにか悪いことをさせる。これがサタン。（私が霊魂を感じて、日本に留学しようと思ったとして、この霊魂はサタンではない？）ない。（何）サタンとはいえないけれど。（あまり意味のないもの？）気にしないほうがいい。
W20-43（そういう、こう、自分が感じるものが、神からの天使だと思うことは、だめなの？マライカの可能性はありますか）あるかもしれない。（うん、あまり意味のないものなのか、マライカなのか、わからないことがあるわけね。）

インタビュー3　バリ島　インドネシア語　２０代　男性　ヒンドゥー　０２年７月３０日　（2章　事例７）

１　（あなたの家族で、この10年の間に亡くなった人はいますか）死んだ人、居ない
２　（人は死後どうなると思いますか）　もう一回魂がインカーネーション（輪廻）することになります
３　（死者が来世で救われるように、どのような儀式を行いますか。文化によって違うところがあれば教えて下さい）あります。　ナベンとヌカというのがある。
４　（死んだ人の写真に花を添えたり、食べ物を備える文化があります。あなたや親戚の考えを教えて下さい）　いいことです。バリの人が信じることは、亡くなった人たちは、本当は体だけがなくなり、魂はそのままこの世界に居ます。（バリの人たちがですか自分が）私たち。
５　（死者の魂は、現世の我々と交流できるという考る文化がああります。例えば、日本の夏の文化であるお盆では、死者の霊がこの世に数日間戻ります。このような考え方をどう思いますか）　いいことです。お盆みたいな祭りがあってから、なくなった人たちに（を）思い出す。（誰が）なくなったひとたちが、思い出す。（誰を）親戚の亡くなった人たちが思い出す。昔のおじいさんとかおばあさんを、お盆で思い出す（我々がということですか）ええ。
６　（死後に、別の人間として生まれ変わると考える文化がありますが、どう思いますか。）私が信じることは、なくなった人たちの魂は、人間にリインカーネーション（輪廻）する。もう一回人間の中に生まれます。
７　（この数十年の近代化で、あなたの周りで死生観に変化がみられますか）　なし
８　（あなたは神はただ一人だと考えますか）　いいえ　神様はひとつなんですけど、いろいろな形、いろいろなファンクション（機能）がある。でも、ひとつ<彼が>信じていることは、ヒャンウディです。それは、一つの神様。
ｂ　（ある宗教に属している人が、その他の超自然的なもの（例えば、カウイ山のような聖なる場所に幸運を祈りに行く）を信じることがありますが、どう思いますか）グヌンカウイに行くことは、よくないこと。あまり好きではない。神様には、お金持ちとかそんな簡単に（して）上げないから。そんな仕事しない、たくさんもらうのは絶対にうそである。仕事をしたら、ちゃんと、金持ちにではなく、ちゃんともらいます。
ｃ　（日本社会では、赤ん坊を神社に連れて行き、結婚式を教会であげ、お葬式をお寺で行うというような混合の伝統があります。この現象についてあなたの考えを書いて下さい）よいことです。だから、それがあってから、それぞれの宗教にも（も）仲良くなる。
もしそれぞれの宗教（仲が）よくなったら、世界もピースフル（平和的になる）なる。
（人間に戻るというが、どれくらいの間たつと戻るか）
私の村の人たちには、人がまた生まれてくるのは、お葬式の終わった後です。
ガベンとニュカの後、お寺の中に、住んでいることにします。その後、もし自分の家族が結婚する人が居たら、そして妊娠して、あそこでまた魂がうまれてくる。もし生きているときに、良いことをしたら、長いこと生まれない。悪いことをしたら、早くまた生まれてくる。これは私の意見です。
<亡くなってからまず葬式があり、ニュカ nyekah（人間を思いだして人形を作り亡くなった魂がそこに入り、お祈りすること、ガベンの後）、ガベンの中で、スカ（人間の形の人形そのもの）を。終わったら、魂が、神様に、世界にいるときに良いことをやったら、天国に入って、なかなか生きさせない。もし悪いことをしたら、すぐ生まれます。それが分かるのは、生まれてからまた、自分で、バリヤンの方に行って、誰々が生まれると、だいたい分かります。
（また人間になることは楽しいことですか）

それは、人間になることは、うれしいこと。いいことです。
（前の人生のことを思い出すことはあるんですか）思い出すことはない。前の人生は分からない。（夢にも出たりもしませんか）
（同席友人：もう一回生まれることですか　）（通訳氏　夢の中にあなたは前だれのたましいだったか出てきますか）夢とか、全くないが、昨日の話で、生まれてから、プラセンター（へその尾）をとってから、バリヤンにお願いし、誰々がまた生まれます。
（バリヤンが分かるだけで）信じているのは、バリヤンから教えてもらって、
誰々がもう一回生まれてくる。ヒンドゥー教の人たちはトゥリムルティという、ブラフマー神、シヴァ神、ヴィシュヌ神、作るはブラフマー、育てるはヴィシュヌ神、殺すはシヴァ神、を信じていることから、絶対に、バリヤンの言っていることは私信じています。
（ふーーん、・・はい。だいたい天国に行く人は１００人に何人行くと思っていますか）はっきり何％か分からないで、でもカルマを信じている。生きているときに良いことをしたら早く天国になる、行くかも知れない。悪いことをしたら、長いこと世界の方に。はっきり分からない。何パーセント。
（イメージでいい。１０％くらいですか？）１００人の中では４０％は（天国）天国にいきます。
（天国にゆくと、神と一体になるか、神のそばにいるのですか）＜彼は＞、神さまのそばにいます、だけ。
（天国はどういう世界ですか）天国は一番いい世界。自分はそこまで考えられないほど良いことしかない。何よりもいい世界。（一度天国に行った人が、また人間になったりすることはありますか）可能性もありますが、時間がかかります。長い時間が。
（天国に行かない場合は、火葬する前は、どこにいますか。魂は）まだ火葬していない魂は、自分の家の周りにいます。お寺の中にガヤ、というお仕事をします。お寺で仕事をする（まだ火葬していない魂への供えものはどこにあげますか）家の、亡くなってから、からだがまだ家にいるときは、ベッドの上にお供え物をあげます。そして、土葬してから墓に行きます。その、土の上にお供え物をあげます。（お墓以外に、お供えものはあげないんですか？）家の中にも供え物をあげます。
＜彼の信じているのは＞魂は、人間と同じように生きています。でも見えない。でも生きています。たとえば、ちょっと祭りがあったら、子供の２１０日の祭り、は魂のためのお供え物を作ります。でも家の中から（に）魂のためにあげます。
（ガルガンの時、魂は家に呼ぶか）彼の村には、家には呼びません。お供えものはお墓に持ってゆきます。食べ物、お供え物と服も持っていきます。（村はどちらのほうですか）パダントガン。ウブド。
（じゃあ、いわゆるウリヤンはしない？）ここでは、ここの村にはウリヤンはない。
（同席友人：＜彼の村には、ウリヤンあります＞デンパサールの北、ウソヤンは、ありま）。
＜通訳氏：昨日も母に聞いたんですけど、ギヤニャールから東まで、クルンクンとかは、ウリヤンはない。母はクルンクンからきましたから。でも、デンパサールから西のシンガラジャまではする＞
ウリヤンの似たようなお供え物は、クニガンの方に（で）あげます。（十日あとですね）
（火葬のあとどこに魂が行きますか）まず、葬式をやってから、魂はお寺周りしから、自分のファミリーテンプルに住みます。（お供えはどこにしますか）ファミリーテンプルの方に、ヒャンイブーという建物があります。そのヒャンイブーのところに、ガルガンのときと、クニガンのときと、ファミリー寺のお祭りオダランのときは、ちょっと大きい供えをあげる。毎日は、チャナンだけの供えものをあげます。（チャナン）小さい、簡単な供えもお（家の中ですか、サンガか）お供えは、ヒャンイブーの前にあげます。（サンガは作らないということです）その建物の名前がヒャンイブー、サンガの代わりに、ヒャンイブー。サンガの形は（同じ）同じです。（ああいうのを）ええ。（ファミリーテンプルは家の中にあるんですか）
＜通訳氏：ファミリーテンプルは全部がファミリーテンプル。（この中の全部）じぶんの土地のエリアの北東はファミリーテンプルです＞（そうですか）
（いくつヒャンイブーがありますか）ヒャンイブーは一つしかない。ヒャンイブーという建物は。でも、窓が二つ。女性、男性。あけたら、ふたつの部屋がある。
（ここの宿のことを聞きますが、あそこのファミリーテンプルはこの宿の持ち主のですか）経営者のファミリーテンプルです。（いくつヒャンイブーとサンガがありますか）ヒャンイブーは絶対一つだけ、だいたい一番南のほう。（サンガは）

＜通訳氏　サンガクムランでは一つの建物なんですが、サンガはファミリーテンプルのすべてのこと＞
（サンガクムランは）クムランはヒャングルーという神様の呼び出しのために。お祈りのため。亡くなった親戚の魂は、ヒャンイブーのところでお祈り、呼び出しをする。
（ここに住んでいる魂はいくつですか）はっきり分からない。昔からみなずっと居る。（たくさんのここの持ち主の祖先がここにいるんですか、遠いところにいて、くるのか）あそこは一番シンプルなサンガ、ファミリーテンプルです。ここの経営している方は、親せきと合わせて大きなお寺を造っています。そこも同じようにサンガヒャンイブーがあります。そこも行ったり来たり、そんな感じになります。
（魂がどこか山の方にいて戻ってくるという考えはないですか）亡くなったときは、ふつうに死ぬときは、それはない。でも、昨日も、サラパティという死は、住んでる場所がないので、山に行ったりあちこちに行く。それはしんじています。（サラパティという死の魂に何かお供えするにはどうします）お供えは、サラパティは、葬式の前は、あちこち行くが、葬式が終わったら、ふつうの魂と同じようにします。
（祖先の魂の中には天国に行く魂もいますよね。天国にいく魂が、時々家に戻ることはありますか？）時間がかかりますけど、絶対また戻ります。ヒンドゥー教のリインカーネーションは、信じています。天国にいるときも、また戻ります。
（じゃあ、２１０日に１回戻るなんて事はないんですね？）今、魂は、祖先の魂は、ヒャンギブーに住んで、生活している。いつでもこの家を見ることもできます。まあガードマンになるし、みてもし悪いことがあったら教えてくれる。
（ヒャンギブーではなくて、天国にいった魂が、神として降りてくることはありますか）天国にいる魂は、この家族を見ることはする。が、人間の中に入ることはない。この世界には出てくる。でも、人間は知らない。もし何かあったとき、もしかしたら、お供え物をあげていないとか、悪いことをしたりとか（すると@）、自分が（の）家族の中で悪いことがあります、たとえば、事故あったりとか。
（神様のそばにいるだけでなく、一体になることもあるのか）ないです。そばにだけいます。
（さっき、・・たくさんの神様にお祈りしますよね。こっちから。たとえば、船に乗るときはどの神に祈るか）海に行くときは、海の事故にならないよう、バルーナ神さまに頼みます。（老人が死にかけているときは誰にお祈りしますか）いろいろに行きます。まずファミリーテンプルにいきます。トリムルティ、ブラマ神、シバ神、ヴィシュヌ神にも行きます。
（試験勉強をしているとき誰に行きますか）サラスワティの場合は、サラスワティの日にお祈りします。もし、試験する前に、ダラム寺院に行きます。
（自分の人生について、神様と心の中で対話するときは。迷っていることは）もし自分が迷っているとき、自分のファミリーテンプルに行って、ヒャングルーにお祈りします。そしてスダーンという、ヒャングルーの下。ヒャンイブーにもお祈りします。
（スダハンというのは）ヒャングルーのランクからみたら下。（ヒャングルーというのは何でしたっけ、＜通訳氏　ヒャングルーは、ファミリーテンプルの守り＞（はあ、神様ですね）＜通訳氏　はい。ファミリーテンプルの一番高いランク＞ヒャングルーと、スダーンと、ヒャンギブー（人間の魂なのでランクは下）が一番下。お寺の中にいるスダーンもいます。外には、プヌグン（土地の）カラン（エリア）penunggun karang、昨日いいました、のスダーンもいます。外の神、プヌグカランの神の下に、スダーンプヌングンカランがいます。ガードマン、自分の土地の守り。は、お寺の中の守り、ガードマン。（ヒャングルーは神様で、スダーンは霊魂ですか）ヒャングルーは神さまですね。スダーンはアシスタント。ずっとヒャングルーのそばにいる、ガードマンみたいなものですね。
（ヒャングルーの神様は高いところにいて見ているだけですか、降りてきて何かするのことはありますか）ヒャングルーは、まず見てから、上の方、見て、何か間違うとき、家族の中で間違えたときは、ヒャングルーは、ちょっと、何というのか、たまに、病気にしたりとか、なかなか治らない。ヒャングルーの方にお願いして治ります。もし家族が悪いことをするとき、ヒャングルーはこうしたらだめだよと言う意味なんですけど、病気になったり。でもヒャングルーの方にお願いしたりして、治ります。
（たくさん祖先がこのファミリーテンプルにいると思いますが、たくさんの魂がすんでいると考えますか、だいたい一つになっていると考えますか）ヒャンイブーのところは場所が、二つの部屋しかない。男性ひとつと、女性ひとつしかない。むこうで一緒に住んでいること。一つになるか、分からない。でも場所は一つしかない。
（ありがとうございます）

文化による死生観・介護観の差異・変容に関する心理福祉学的調査研究

発行人　中村　俊哉

〒811-4192　福岡県宗像市赤間文教町1-1
福岡教育大学学校教育講座心理学系
TEL　0940-35-1491
E-Mail　nakamush@fukuoka-edu.ac.jp

印刷　城島印刷